筑波大学　先史学・考古学研究　第 33 号　61-89　2022

論文

西アジア先土器新石器時代における「特殊建物（公共建造物）」

上田　浩将

本稿では，先土器新石器時代，特に先土器新石器時代 A ～ B 期（PPNA ～ PPNB 期）[1] を中心に，現在のトルコ共和国南東部地域及びシリア・アラブ共和国北部地域において確認されている公共的機能・性格を有する「特殊建物」について論じる。「特殊建物」が集中して建築されたギョベクリ・テペ（Göbekli Tepe）遺跡を含めたトルコ南東部・シリア北部に分布する「特殊建物」を比較・検討し，その構造的特徴と機能・性格を明らかにすることを目的としている。

本稿での比較・検討を通して，トルコ南東部とシリア北部では「特殊建物」の様相が異なること，集落内に「特殊建物」が存在することが一般的で「特殊建物」のみが集中して検出されるギョベクリ・テペ遺跡は特異な事例であること，「特殊建物」は複合的な機能をもち，状況によって「特殊建物」としての複数の性格を有していた可能性があることを指摘した。

はじめに

近年，トルコ南東部のギョベクリ・テペ遺跡への考古学的な関心が高まっているが，その構成要素である「特殊建物」に関する研究は進展しておらず，その実態についての体系的な研究は管見によれば存在しない。本稿では未だ実態が不明瞭な「特殊建物」の事例をトルコ南東部・シリア北部において集成・整理し，各遺跡・遺構の比較検討を通じて「特殊建物」の構造的特徴と機能・性格について考察する。また本稿のような「特殊建物」についての研究は，先土器新石器時代（PPN 期）における人間社会の様相や定住狩猟採集民の社会組織・構造, 集団のリーダーの存在と「権威・権力」の関係性などを解明する糸口として大変重要で大きな意義がある。

なお，本稿では各遺跡の報告で絶対年代が「cal BC/cal BCE」以外の形式で表記されている場合（BP/^{14}C BP/uncal BP/cal BP など), IntCal13 とベイズ統計を基にした OxCal Program を用い，95.4％の信頼限界を含む範囲で算出された較正年代である「cal BCE[2]」へ変換して表記する [3]。また，本稿で分析対象とする建物に対して，複数ある英語名称のうち“Special Building”を「特殊建物」と訳出して使用する [4]。なお遺構に関しては可能な限り内側の石壁から内部の規模を計測する「内径」を用いて表記し，その情報が不足している場合は外側の石壁も含めて遺構の規模を計測して表記することにする。

Ⅰ．研究史および研究の目的

1.「特殊建物」に関する研究史

1940 ～ 50 年代のブレイドウッド（R. J. Braidwood）によるジャルモ（Jarmo）遺跡の発掘調

査や 1950 年代のケニヨン（M.K.Kenyon）によるイェリコ（Jericho）遺跡の発掘調査のように，従来の西アジア新石器時代研究で考古学研究者が高い関心を抱いた地域は，いわゆる「肥沃な三日月地帯」やその周辺地域であった。具体的には現在のシリア，レバノン，ヨルダン，イスラエル，パレスチナを含むレヴァント地方であり，現在のイラク・イランの国境地帯にあたるクルディスタン・ザグロス山脈周辺地域である。現在においても重大なテーマである都市や農耕の起源解明を目的として，特に第二次世界大戦以降，「肥沃な三日月地帯」における考古学的調査が活発になる。

一方で現在のトルコに相当し，「肥沃な三日月地帯」の北辺に位置するアナトリア地域では，1960 年代にチャタル・ホユック（Çatal Höyük）遺跡やチャヨニュ（Çayönü）遺跡の発掘調査などが行われ，それらの遺跡が「新石器化（Neolithization）」の過程を示す考古学的証拠であるとの評価を受けつつも，レヴァント地方などと比較すると研究はあまり進展しなかった。しかしながら，1980 年代のネヴァル・チョリ（Nevalı Çori）遺跡の発掘調査で「特殊建物」である「カルト・ビルディング（Cult Buildings）」が検出されたことが「特殊建物」への高い関心を集める 1 つの大きな契機となる。それ以降，ギョベクリ・テペ遺跡やグシル・ホユック（Gusir Höyük）遺跡など，トルコ南東部各地の PPNA ～ PPNB 期の遺跡からの「特殊建物」の検出が報告されるようになる（Karul 2011，Schmidt 2012a）。特に最近では，ギョベクリ・テペ遺跡周辺の遺跡においてもギョベクリ・テペ遺跡の「T 字形石柱（T-shaped pillars）」に類似した石柱が踏査などで相次いで確認されており（Çelik 2014・2015・2016，Schmidt 2012a），それらを有する遺跡数がさらに増加する可能性がある（例えば Karul 2021）。

またトルコ南東部以外の地域でも，ヨルダンのワディ・フェイナンの WF16 遺跡のように，今まで「特殊建物」が検出されていなかった地域においても検出される事例が増加している。このことから「特殊建物」はトルコ南東部特有の遺構ではなく，むしろ西アジアの PPN 期にはある程度一般的であった可能性が指摘されている（三宅 2014）。

2．先行研究における問題点

しかしながら，「特殊建物」についての先行研究には 2 つの大きな問題点がある。1 つは PPN 期のトルコ南東部やシリア北部における「特殊建物」を扱った先行研究がそもそも少なく，現状として詳細な発掘調査データに基づいた「特殊建物」に関する議論が十分に深化できていない点である。遺構・遺跡ごとの個別的な先行研究は多少存在するが（例えばシュミット（K. Schmidt）のギョベクリ・テペ遺跡に関する諸研究），それらを地域あるいは時期に基づいて集成・整理し地域的・時期的な変遷を論じた先行研究は，「特殊建物」という空間が多様なアイデンティティや共同体に関する社会的交渉を表現し，地域集団を統合するための媒体であったと評価したアタクマ

第 1 表　本稿における時期区分

時期区分	cal BCE
PPNA期	10200～8800
PPNB前期(Early PPNB)	8800～8200
PPNB中期(Middle PPNB)	8200～7600
PPNB後期(Late PPNB)	7600～6900

ン（Atakuman 2014）や，PPN 期西アジアの「特殊建物」を集成し，その社会的影響力の大きさを論じたコルニエンコ（Kornienko 2009）を除いて存在しない。遺跡単位の枠組みから拡大して PPN 期における遺跡ごとの「特殊建物」を地域的・時期的な観点から比較・考察した研究は残念ながらあまり進展していないのが現状である。

もう 1 つは「特殊建物」とみられる遺構の認定に，ある意味で「揺らぎ」がある点である。すなわち，「特殊建物」という用語について，「PPNA ～ PPNB 期の人間が居住した考古学的証拠に乏しく，住居であるとは推測し難しい，周囲の遺構ともいくつかの要素で異なる構造的特徴を有する（公共的性格を有した）遺構」という以上の統一された見解を見出せていない現状がある。中には「特殊建物」だけでなく，住居も含めた遺構全般を取り上げ，集落という広い視点で論じた研究もあるが（例えば Atakuman 2014），「特殊建物」という用語に対して明確な定義を行った先行研究は管見によれば存在しない。またこれと関連して「特殊」という用語が示す範囲があまり明確にされていないという問題がある。

したがって，遺構の特徴を捉え「特殊建物」に関する議論を深化させるためにも，トルコ南東部・シリア北部各地の「特殊建物」とみられる遺構群を集成・整理して「特殊建物」の特徴・性格を明らかにすることは大変重要な意義があると考える。

Ⅱ．「特殊建物」を有する遺跡

本章ではトルコ南東部・シリア北部に分布する遺跡の中で「特殊建物」とみられる遺構を有する遺跡を集成し，その構造的特徴や性格について概観する。

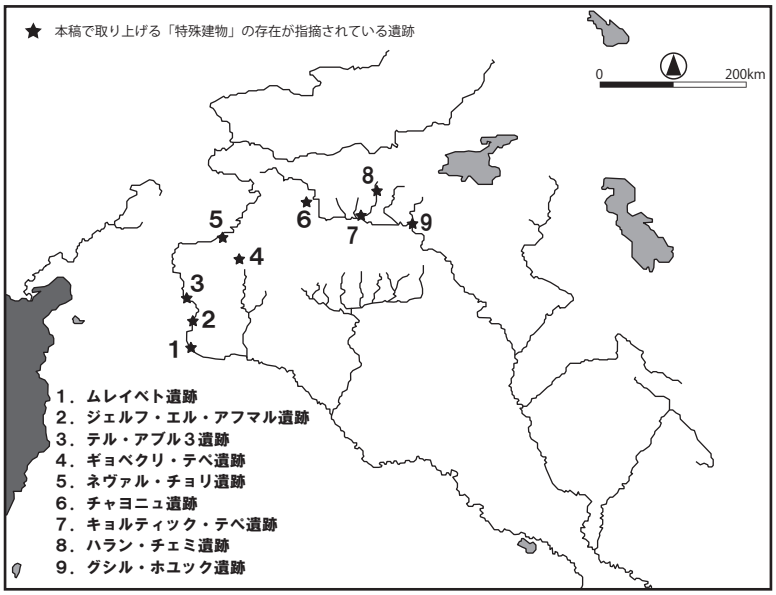
1．トルコ南東部

(1) ギョベクリ・テペ遺跡

イ）遺跡の概要と年代

ギョベクリ・テペ遺跡はトルコ南東部のシャンルウルファ（Şanlıurfa）市の北東約 15 km に位置する（第 1 図）。標高約 800 m [5] の石灰岩台地とハラン平原の境界付近に立地し，南はハラン平原へ開けている（Knitter et al. 2019）。現在の水源からは約 5 km 離れており，定住に適さない土地との評価がある（三宅 2014，Dietrich and Notroff 2015）。「テペ（遺丘）」の規模は直径約 300 m，高さ約 15 ～ 20 m，面積は約 9 ha に及ぶ（Kornienko 2009，Pustovoytov 2006，Schmidt 2000，2010・2012a）。遺跡近辺では「T 字形石柱」の石切場が確認されており，中には縦約 7 m，横約 3 mの規模の石柱も残存している（Schmidt 2012b）。ギョベクリ・テペ遺跡が立地する石灰岩台地の大部分は新第三紀中新世に形成され，PPN 期当時も現在と同様に石灰岩が露出した状態であったと想定されている（Knitter et al. 2019）。また気候に関しても，PPN 期は大まかには現在と同じ地中海性気候（Cs）であった可能性が指摘されており，遺跡周辺は PPN 期当時も現在と類似した景観・環境であった可能性が高い（Knitter et al. 2019）。

ギョベクリ・テペ遺跡の層序は第 I 層（ローマ時代以降），第 II 層（PPNB 前期～中期），第



第 1 図　本稿で言及する遺跡の分布図

III 層（PPNA ～ PPNB 前期）の 3 つの層位に区分され[6]，遺跡全体の時期は PPNA ～ PPNB 中期である。PPN 期の遺跡が廃棄された後の第 I 層は浸食が激しく，詳細は不明である。石器などの PPNB 後期以降の考古学的証拠が出土していないことから，PPNB 後期には既に遺跡が廃棄されていた可能性が指摘されている（Schmidt 2012b）。炭素 14 年代測定による年代もその見解を支持するもので, 9664 ～ 7796 cal BCE の範囲に収まる。また遺跡が廃棄された時期として，8241 ～ 7796 cal BCE の年代が示されている（Dietrich et al. 2013）。

また，発掘調査では大部分の「特殊建物」から経年による自然堆積の土砂はあまり検出されていない。むしろ大半が石灰岩片で，その他石製容器，石皿，敲石あるいは石杵の破片などの遺物の細片，細かく破砕された野生種のガゼル，アカシカ，ノロバ，イノシシ，ヒツジなどの動物骨片などが大量に遺構の覆土として検出された。このような人間活動を示唆する堆積物の検出から，遺構の廃棄直前のごく短期間に意図的に「特殊建物」が埋められた可能性が指摘されている（Schmidt 2010，2012a）。シュミットは遺跡から明確な住居の痕跡が見られないことを指摘しており（例えば Schmidt 2010・2012a・2012b など），ギョベクリ・テペ遺跡自体が定住集落ではなく，当時の人々の祭祀の場のような特殊な遺跡であった可能性を指摘している（Busacca 2017，Dietrich et al. 2012，Schmidt 2010・2011a・2012a・2012b）。

ロ）第 III 層の遺構

ギョベクリ･テペ遺跡の特徴的な遺構として第 III 層には「エンクロージャー[7]」がみられる。エンクロージャー A ～ H の 8 基が 2019 年までに検出され（Knitter et al. 2019）, エンクロージャー A ～ D, F, G は「主要発掘区」と呼称される遺跡南部, エンクロージャー E は南西部, エンクロー

ジャーHは西部に位置する。さらに地中レーダー探査ではエンクロージャーA～H以外にも円形遺構が複数確認されており，少なくとも20基の「エンクロージャー」と200本以上のT字形石柱が存在する可能性が指摘されている（Schmidt 2011a）。「エンクロージャー」では本体の高さが最大5.5 m，重さ数十tのT字形石柱が遺構の石壁付近に12本前後でほぼ均等に配置され[8]，中央には2本1対で一際大きなT字形石柱（a central pair of T-shaped pillars）が向かい合って配置されていた[9]。また，石灰岩の岩盤の削り出しやテラッゾ[10]など床面加工に多大な労力が投入されており，同位置に遺構が複数建替えされた痕跡があった。炉はなく，ベンチ状構造物（ベンチ状の高まった基壇）を有し，T字形石柱表面には動物などの豊かな図像表現がみられる。以上のような特徴を「エンクロージャー」は有する。

ハ）第II層の遺構

第II層からは「特殊方形遺構[11]」が検出されている。「主要発掘区」において多数検出されているが，第III層の遺構と比較すると，その構造的特徴をある程度継承しつつも規模が縮小し，T字形石柱も平均の高さが1.5 mとなり，図像表現もほとんどみられなくなる。

ニ）ギョベクリ・テペ遺跡の周辺遺跡

ギョベクリ・テペ遺跡のほかにも，ハラン平原周辺にはクルト・テペシ（Kurt Tepesi）遺跡，ハーベツヴァン・テペシ（Harbetsuvan Tepesi）遺跡，ハムザン・テペ（Hamzan Tepe）遺跡，カラハン・テペ（Karahan Tepe）遺跡，タシュル・テペ（Taşlı Tepe）遺跡，セファー・テペ（Sefer Tepe）遺跡，アヤンラル・ホユック（Ayanlar Höyük）遺跡，シャンルウルファ・イェニ・マハレ（Şanlıurfa-Yeni Mahalle）遺跡などからT字形石柱や石柱の台座などが確認され，T字形石柱の規模や表採遺物の特徴からPPNA後期～PPNB初期の定住集落遺跡とみられている（Çelik 2011・2014・2015・2016・2017）。特にカラハン・テペ遺跡では最近発掘調査が行われ，内部にベンチ状構造物を有する円形遺構が確認されている（Karul 2021）。

(2) ハラン・チェミ（Hallan Çemi）遺跡

トルコ南東部のバトゥマン（Batman）市から北約50 kmに位置し，面積約5 haの遺跡である。PPN期の層位4層のうち3層（第3～1層）が発掘された。炭素14年代測定によって約9500 cal BCEに至るまでの約数百年間営まれた，通年の定住集落であったと考えられている（Rosenberg 2011）。集落中央の直径約15 mの広場では，動物骨と被熱により割れた河原石が高密度で検出され，そこでの食糧の消費を伴う饗宴の可能性が指摘されている。また広場の周囲からは石や粘土・白色プラスターが用いられた直径約2 mの円形の床面を持つ遺構が検出され，上部構造が木材などで築造された貯蔵穴の可能性があること，3層全てにおいて直径約50～70 cmの炉が検出され，その多くで白色プラスターが検出されていること，被熱土と木片が大量に検出され，後者は建築材の可能性があることが指摘されている（Rosenberg 2011）。

最上層の第1層からは遺構4基が検出され，全ての遺構の床面に砂岩製板石の敷石がある。一方で河原石への白色プラスターの貼り付けはなされていない。このうちの2基は地上式の直径約2.5 mのC字形をした遺構で，住居の可能性がある。残りの2基は直径約5～6 mの円形

の半地下式構造の遺構で，石壁内面に沿ってベンチ状構造物があり，報告者は「特殊建物（Public Building）」の可能性を指摘している（Rosenberg 2011）。床面には黄砂を混ぜたプラスターが数回貼られた痕跡があり，うち 1 基では北側の石壁壁面に掛けられていたと想定されているオーロックスの頭蓋骨が，入口付近から検出されている（Rosenberg 2011）。

（3）キョルティック・テペ（Körtik Tepe）遺跡

トルコ南東部のバトゥマン市の西約 30 km に位置し，面積約 2.8ha の遺跡である[12]。炭素 14 年代測定による年代は 10405 ～ 9280 cal BCE で PPNA 期前期にあたる（Özkaya and Coşkun 2011）。PPN 期の層位は少なくとも 6 層に区分され，全ての層位から円形遺構が検出されている。遺構の床面には粘土が貼り付けられ，ある程度の高さまで自然石，砥石，石皿を用いた石壁が残存している（Özkaya and Coşkun 2011）。

遺構 Y3・Y11・Y44 の 3 基は「特殊建物」であるとされている。遺構 Y3 は直径約 3.45 m，深さ 0.98 mで粘土が貼り付けられ，床面上から野生ヤギの頭蓋骨・角が検出された。遺構 Y44 は直径約 3.8 m，深さ 1.35 mで床面上からは野生ヤギの頭蓋骨・角が検出されている。遺構 Y11 は直径約 3.42 m，深さ 1.8 mで完全な調査がなされていない（Özkaya and Coşkun 2011）。また内部から炉が検出されている（Benz et al. 2013, Benz et al. 2015, Schreiber et al. 2014）。

（4）グシル・ホユック遺跡

トルコ南東部のシイルト（Siirt）市の南約 40 km にあるグシル湖の湖岸に位置する。遺跡頂上の標高は 535 mで，遺跡の高さは約 7 ～ 8 m，直径約 150 mの範囲で，PPN 期の通年の定住集落遺跡である。2010 年までに全体で約 900 ㎡の面積が発掘されており，少なくとも 4 層の層位が確認されている（Karul 2011）。炭素 14 年代測定による年代は 9447 ～ 8857 cal BCE であり，出土遺物の諸特徴も同様の傾向を示している（Karul 2011）。

遺構のほとんどは円形遺構であるが，特筆すべきは直径約 10 m，内径約 7 mの隅丸方形遺構である。報告者は「特殊建物（Cult Building）」であった可能性を指摘している[13]（Karul 2011）。この「特殊建物」の内部は部分的に河川礫によって構築され，礫の一部には被熱の痕跡がある。遺構の中央からは直立した状態で幅約 0.8 m，厚さ約 0.2 m の石板（石柱？）1 基が検出された。この遺構の他には同様の形状でやや規模の小さい遺構が少なくとも 5 基確認され，うち 1 基は最上層の「特殊建物」と同様に直立した石板（石柱？）が確認された。隅丸方形の「特殊建物」の西側には広場があり，人骨 3 体が検出されている（Karul 2011）。

（5）チャヨニュ遺跡

トルコ南東部のエルガニ（Ergani）市から南西へ約 10 km，標高 832 mに位置し，規模は 350 m × 160 m（= 5.6 ha）である。PPN 期を通して継続的に営まれた定住集落遺跡である[14]。古い時期から「ラウンド・ビルディング（Round Building）」層（10080 ～ 8633 cal BCE），「グリル・ビルディング（Grill Building）」層（8726 ～ 8282 cal BCE），「チャネルド・ビルディング（Channeled Building）」層（8301 ～ 8223 cal BCE），「コブル・ペーブド・ビルディング（Cobble-Paved Building）」層（8269 ～ 7587 cal BCE），「セル・ビルディング（Cell Building）」層（7602

～ 7326 cal BCE），「ラージルーム・ビルディング（Large Room Building）」層（7308 ～ 6831 cal BCE）に区分される。

「ラウンド・ビルディング」層（r1-4）では，直径約 4 ～ 5 mの半地下式構造の円形遺構が検出されている。遺構は遺跡東部に分布が集中しており，床面に赤彩色が施された住居 RA が検出されている（Erim-Özdoğan 2011）。

「グリル・ビルディング」層（g1-6）では，単室の方形遺構が検出されるようになる。この時期より「特殊建物」とみられる遺構が検出され始める[15]が，明確な遺構は「チャネルド・ビルディング」層から確認できるようになる（Erim-Özdoğan 2011）。

「チャネルド・ビルディング」層（ch1-4）では，遺跡全体で隅丸方形または方形の遺構が一般的となる。また，遺跡内の空間が区分されるようになり，西部に道具の製作工房や住居の集中区域が，東部に集落の「特殊建物」の「公共的な」集中区域が形成された。加えて，東部の約 1000 ㎡の範囲からは屋外炉が計 46 基検出された。周辺からは約 10 m × 7 mの半地下式の方形遺構で，床面に大きな板石の敷石がある「フラッグストーン・ビルディング（Flagstone Building（FA））」が部分的に検出された[16]。その北東部からは円形で直径約 6.5 mの半地下式の「スカル・ビルディング（Skull Building（BM1））」が検出されている。「スカル・ビルディング（BM1）」では中央に板石（石柱？）2 基が壁柱と向き合う形で設置され，東側の石壁内にも 1 基が据え付けられていた。床面は粘土が貼り付けられ，床下からは土坑墓が 2 基検出されている。うち 1 基からは二次葬の性格を有する頭蓋骨 15 個が，もう 1 基からはオーロックスの頭蓋骨・角を伴う，頭蓋骨を欠損した人骨が検出されている。報告者は「フラッグストーン・ビルディング」と「スカル・ビルディング」の注目すべき特徴として，住居が地上式になった後も「特殊建物」は半地下式の遺構として築造される点を指摘している（Erim-Özdoğan 2011）。

「コブル・ペーブド・ビルディング」層（cp1-3）では，方形で 8.7 m × 5.8 mの半地下式の「スカル・ビルディング（BM2）」が円形の「スカル・ビルディング（BM1）」の直上から検出された。この遺構は北側に内部で繋がった 3 ～ 4 室を有し，南側にプラスターの床面で西側の石壁付近に方形の板石が配置された方形の「中庭」空間を有する。また，東側の空間からは前身の遺構（BM1）由来とみられる石材・破片などの堆積が確認され，遺構廃棄時に意図的に埋められたと考えられている。さらに「スカル・ビルディング（BM2）」からは，頭蓋骨のみや長骨のみが集中して検出された箇所や頭蓋骨を欠損した人骨が床下の墓から大量に検出された箇所が確認されており，検出された人骨は計 450 ～ 600 個体にも及ぶ[17]。「スカル・ビルディング（BM1・BM2）」では，二次葬との密接な関係性や住居であったものが「特殊建物」への転用された可能性が報告者によって指摘されている（Erim-Özdoğan 2011）。また，この時期より遺跡の東部で遺構を埋めて整地された跡地に広場が形成されるようになり，その南東側からは礫を敷き詰めた床面と石壁に沿ってベンチ状構造物を有する「ベンチ・ビルディング（Bench Building（BK））」が検出されている（Erim-Özdoğan 2011）。

「セル・ビルディング」層（c1-3a-b）では，この時期の初期の東部広場では一定間隔に並ん

で配置された直立した高さ約 1.5 ～ 2.8 mの石板列が確認されている。広場については外部空間でありながらもその機能として「特殊建物」に匹敵する空間であったと評価されている。また,「セル･ビルディング」層の時期の後期には広場の北東に「テラッゾ･ビルディング（Terazzo Building）」が検出されており，遺構の規模は約 11 m × 8 mで壁に沿って石柱 2 基が向かい合って設置されていた。床面は桃色がかった赤色石灰岩片と白色石灰岩片が混合された石灰プラスターが用いられ，表面も滑らかに磨かれている（Erim-Özdoğan 2011）。遺構内部の北東側からは半円形の炉が検出された。人面の図像表現が検出され, ギョベクリ･テペ遺跡やネヴァル･チョリ遺跡の図像表現との類似が指摘されており，ユーフラテス河流域との文化的関係性を示唆している（Erim-Özdoğan 2011）。なお,「テラッゾ・ビルディング」は遺構中央の床面が破壊された後に遺構が廃棄された（Erim-Özdoğan 2011）。

「ラージルーム・ビルディング」層（lr1-6）では，遺跡規模が縮小して西部で遺構が検出されなくなる一方，東部区域に住居が建築されるようになる。東部広場も維持されるが,「テラッゾ・ビルディング」は完全に廃棄される（Erim-Özdoğan 2011）。

(6) ネヴァル・チョリ遺跡

シャンルウルファ市から北西へ約 40 km，ユーフラテス河から約 3 km 南へ離れた，PPNB 前期～中期の遺跡である。遺跡東部は良好な状態で保存されていた一方，西部は大きく浸食されていた（Hauptmann 2011）。炭素 14 年代測定による年代は約 8400 ～ 8100 cal BCE である（Hauptmann 1999）。層位は古い順から第 I ～ VII 層に区分され，第 I ～ V 層は PPN 期に属する。規模の大きな遺構が検出され，報告者はそれらを「特殊建物（Cult Building）」と解釈している（Hauptmann 2011）。他にも遺構内部が区画された方形遺構が検出されており，住居とみられる。第 I ～ IV 層の住居も含めた遺構の多くに（同位置での）建替えがみられ，遺構入口は南西～南東に向く傾向がある（Hauptmann 2011）。

第 II 層において遺跡の北西端からは「カルト・ビルディング II（Cult Building II）」が検出されている。規模は 13.9 m × 13.5 mでほぼ正方形であり，周囲には遺構を囲む石壁の一部が残存することから「カルト・ビルディング II」の前身となる遺構が存在した可能性が高い。中央や周囲の石壁には柱穴とみられる大きな窪みが 2 箇所検出されており，T 字形石柱が設置されていた可能性がある。床面はテラッゾで 10 cm 以上の厚みがあり，表面には石灰岩の断面がみられる。遺構南西側の入口には遺構内部へ続く階段が残存し，石壁沿いに板石の敷石があるベンチ状構造物が検出されている（Hauptmann 2011）。

第 III 層では遺跡南東の住居分布範囲（住居 2・3・6・7・10・15・16）から離れた遺跡北西端から「カルト・ビルディング II」の直上より「カルト・ビルディング III（Cult Building III）」が検出されている。この遺構は前身である「カルト・ビルディング II」由来の石壁内側に直接建造されており，規模は 12.1 m × 12.8 mのほぼ正方形である。報告者はギョベクリ・テペ遺跡の「特殊建物」との類似性を指摘しており，①中央に柱穴とみられる窪み 1 箇所と，上部が欠損して直立したまま残存した石柱が検出されたこと，②遺構の石壁内面に沿ってベンチ状構

造物がみられること，③石壁付近の石柱 2 本の側面に「人間（の男性）」を描写した図像表現が認められること，といった構造的特徴を提示している（Hauptmann 2011）。床面のテラッゾは建替え時に再加工され，遺構内部のテラッゾは「カルト・ビルディング II」のものがそのまま利用されている。また，石壁の中からは「カルト・ビルディング II」から再利用されたとみられる石材やその破片，彫像の一部などが多数確認されている。報告者は「カルト・ビルディング II・III」ともに立地や精巧な建築，装飾・彫刻などから，祭祀を行うための「特殊建物」である可能性を指摘している（Hauptmann 2011）。

２．シリア北部

(1) ジェルフ・エル・アフマル（Jerf el Ahmar）遺跡

シリア北部のユーフラテス河左岸に位置する小規模な定住集落遺跡である。遺跡は東部と西部の 2 つの丘から構成される。遺跡東部の丘では 10 層に区分され，円形遺構が検出される第 VII ～ IV 層，直線的・曲線的な遺構が混合して検出される第 III ～ I 層，方形遺構が検出される第 0 ～ − II 層から構成される。一方，西部の丘では第 III ～ 0 層に区分される。炭素 14 年代測定による年代は 10921 ～ 7970 cal BCE である（Stordeur 2015）が，層位的に最も古い東部第 VI または VII 層の年代が 10439 ～ 9748 cal BCE，最も新しい東部第 − II 層の年代が 9308 ～ 8482 cal BCE であることから，概ね PPNA 期から PPNB 期への過渡期の時期になる（Stordeur 2015）。

東部第 II 層の遺構 EA7 は直径約 7 mの円形の半地下式構造で，柱穴 19 基を有する。北側からはベンチ状構造物が確認されている。石灰岩で仕切り壁が構築され，壁沿いに 2 室認められる。遺構 EA7 の南西側は一部が欠損し，報告者は穀物貯蔵庫であった可能性を指摘している（Stordeur 2015）。第 I 層の遺構 EA7b は遺構 EA7a 直上に建替えられたもので，ほぼ同様の構造を有した直径約 8 mの半地下式の円形遺構である。また遺構 EA7a に由来する柱穴からは墓が未検出であるが頭蓋骨 1 点が検出されている。遺構 EA7a と同様に穀物貯蔵庫であった可能性が指摘されている（Stordeur 2015）。

東部第 − II 層の遺構 EA53 は直径約 7 mの円形で深さ約 2 mの半地下式構造の遺構である。炭素 14 年代測定による年代は 9108 ～ 8727 cal BCE である。また直径約 6 ～ 18 cm の柱穴が 26 ～ 30 基検出されており，その他にも直径約 25 ～ 35 cm の支柱が検出されている。遺構西側を除く石壁の内側全体にベンチ状構造物が配置されている。床面は礫が敷かれ，粘土プラスターが貼り付けられている（Stordeur 2015）。

西部第 II 層の遺構 EA30 は直径約 7 mの円形の半地下式構造で，火災によって焼失した遺構である。炭素 14 年代測定による年代は 9183 ～ 8605 cal BCE である。少なくとも柱穴 14 基を有し，北西側の 2 箇所からベンチ状構造物が検出されている。また石灰岩によって壁沿いに 7 室が構築されており，中央床面から頭蓋骨を欠損した人骨（若年女性）が検出された。遺構内部から墓は検出されていないが，この女性人骨は意図的に放置された可能性が指摘されている。また

ムレイベト遺跡の遺構 47 との構造的類似性が指摘されている（Stordeur 2015）。

(2) テル・アブル 3（Tell 'Abr 3）遺跡

トルコ国境から約 15 km 離れたシリア北部のユーフラテス河左岸の PPNA 期の遺跡で，この時期の遺跡ではトルコに最も近い。ユーフラテス河に近い南発掘区とそこから 150 mほど離れた北発掘区の 2 地点が調査されている。遺構 M1a の壁際と遺構 M10b の石組隙間から植物遺存体（種子）が検出されており，炭素 14 年代測定の結果，南発掘区の遺構 M1a からは 9252 ～ 8837 cal BCE, 北発掘区の遺構 M10b からは 9291 ～ 8924 cal BCE の年代が得られている（Yartah 2013）。北発掘区では 375㎡が調査され，古い時期から第 IV ～ 0 層に区分されているが，第 III ～ IV 層からは遺構は未検出である。南発掘区では 250㎡が調査され，古い時期から順に第 II ～ 0 層に区分されている。北発掘区の第 0 層からは遺構 M10a・M11 が，第 I 層からは遺構 M4・M6 ～ 9・M10b が，第 II 層からは遺構 M5 が検出された。南発掘区の第 0 層からは遺構 M2・3 が，第 I 層からは遺構 M1a が，第 II 層からは遺構 M1b が検出されている。また遺構 B2 は浸食により時期不明である。報告者は遺構 M4 ～ 9 が住居，遺構 M1a・M1b・M3・M10a・M10b・B2 が「特殊建物（Communal Building）」であった可能性を指摘している（Yartah 2013）。

北発掘区の第 I 層では，直径約 8 m，深さ約 1.2 mの半地下式の円形遺構である遺構 M10b が検出され，直上にはほぼ同規模の遺構 M1a が位置する。内部には 1.4 m × 2.6 mの範囲で高さ約 0.6 mのベンチ状構造物があり，焼失した痕跡がある。床面は粘土プラスターが用いられ，柱穴が 5 基検出されている。内部からは人間の頭部を模した石像や石製ビーズが出土している（Yartah 2013）。

北発掘区の第 0 層では，直径約 7 mの半地下式の円形遺構である遺構 M10a が検出され [18]，ほぼ直下の第 I 層からは遺構 M10b が検出されている。住居の集中区域から西側へ約 18 m離れた地点に位置し，遺構の大部分が破壊されているが，遺構の下部構造は比較的良好な状態で残存している。内部には仕切り壁の痕跡があり，内部空間が半円状に分割された可能性がある。また，石壁沿いに 4 ～ 5 室が仕切り壁で構築され，いずれも深さ約 1 ～ 1.5 mの半地下式構造である。石壁は長方形に成形された約 14 ～ 24 cm の石灰岩を積み，粘土プラスター [19] が貼り付けられている。周囲を石灰岩で補強された柱穴が数基，また床面からは炉 1 基と炭化材が検出されており，屋根が架けられていた可能性がある。またオーロックスの骨・角の破片などが検出されている（Yartah 2013）。

北発掘区から約 150 m離れた地点に位置する南発掘区の第 0 層の遺構 M3 は，直径約 7.5 m，深さ約 0.65 mの半地下式の円形遺構であり，ユーフラテス河の方向である南西に向いていた遺構の可能性がある。焼失した痕跡があり，内部は分割され，半円形に 2 室に区切られている。直径約 0.5 m と直径約 0.7 m，深さ約 0.25 m の炉が 2 基検出された。また動物図像が描かれた 22 cm × 22 cm × 12 cm の石板が壁沿いから検出されている。さらにドアの軸受けらしき環状石製品が内部空間を区切る壁の角から出土したことから，室内に幅約 0.6 m のドアがあった可能性が示唆されている。遺構からはオーロックスの骨や石灰岩製の小像が検出されている

（Yartah 2013）。

南発掘区の第 I 層で検出された遺構 M1a は，直径 7.9 m，深さ約 1.1 mの半地下式の円形遺構であり，焼失した痕跡がある。遺構 M1b の直上に位置し，建築材が再利用された形跡がある。内部に直径 10 ～ 25 cm の柱穴があり，木製の柱が屋根を支えていた可能性がある。中央付近からは直径 40 cm，深さ 25 cm の柱穴を伴う 2.6 m × 2 m，高さ約 0.5 mのベンチ状構造物が，南東･北西付近からもベンチ状構造物が 2 基検出され，その近くからは炉が 1 基検出されている。また仕切り壁がなく，貯蔵室としての構造的特徴が乏しいにもかかわらず，遺構東壁の近くからライムギの炭化種子が検出されている。このことから腐りやすい動植物由来の容器に食料を保管した貯蔵庫として利用された可能性が指摘されている。さらにオーロックスなどの動物骨やヒトの指骨，大腿骨などが検出されている（Yartah 2013）。

南発掘区の第 II 層で検出された遺構 M1b は直径約 6 mの円形遺構である。遺構内部の南側の長さ約 2 m，幅約 1.2 mの楕円形の範囲から，堆積した動物骨が集中して検出された。石壁に沿って柱穴が検出されている。また南西側には炉があり，中からはオーロックスの骨が検出されている（Yartah 2013）。

遺構 B2 は人造湖（ティシュリム湖）の浸食により層序不明であるが，直径約 10 ～ 12 m，深さ 1.55 mの半地下式の円形遺構である。焼失した痕跡があるが残存状態は比較的良好で，壁柱は木製で屋根があった可能性がある。床面に排水溝らしき細い溝と円形の窪みが検出されている。長さ約 60 cm，厚さ約 10 cm，幅約 20 ～ 40 cm の石板が計 16 点検出され，うち 4 点にはガゼル，ヒョウ，オーロックスや人間の図像などが描写されていた（Yartah 2013）。

（3）ムレイベト（Mureybet）遺跡

ユーフラテス河左岸，アレッポ市の東約 86 km にある遺跡で，PPNA ～ PPNB 期に定住化が進行していった集落であった可能性が高い。また発掘箇所は一部であるが検出された遺構数が多く，比較的建物が密集していた可能性がある。炭素 14 年代測定による年代は 10883 ～ 7601 cal BCE であり，PPNA ～ PPNB 中期に相当する（Ibáñez 2008）。コヴァン（J. Cauvin）による 1971 ～ 1974 年の発掘調査では 925 ㎡の面積が発掘された。調査では IA ～ IVB の 8 つに時期が区分され，計 25 の層位に区分されている（Ibáñez 2008）。

第 14a 層の遺構 47 は直径約 6 m，深さ約 2 mの円形遺構である。複数の柱穴が検出され，床面に粘土プラスターが貼り付けられている。この遺構は住居とされているが，報告者は遺構 47 が「特殊建物」である可能性も否定していない（Ibáñez 2008）。実際，遺構 47 を「特殊建物」であると指摘する研究者もみられる（例えば Stordeur 2015）。内部は石材・木材で補強された仕切り壁によって 7 室に不均等に分割され，中央は未分割の多角形空間となっている。柱の痕跡が壁内部及び側面にあり，壁は複数回にわたって粘土が貼り付けられ，壁面の一部には赤色顔料で線が描かれていた。また北側には石壁内側に沿って一部ベンチ状構造物があり，内部に炉らしき遺構がある。動物骨，石製ビーズをはじめとする石製品が出土し，炭素 14 年代測定によって 10108 ～ 9147 cal BCE の年代が得られている（Ibáñez 2008）。

第 15b 層に帰属する遺構 21bis と第 15c 層に帰属する遺構 21 の 2 基が存在し，それぞれ全体の約 1/4 が調査されている。遺構 21bis は直径約 5 mの円形遺構であり，床面には粘土が貼り付けられている。また遺構 21bis の東側には内部空間を分割する直線状の仕切り壁が部分的に残存している。遺構 21 は直径約 5.7 mの円形遺構で，遺構 21bis と同様，内部に仕切り壁が残存している。遺構 21 内部の未使用炉の直下からは頭蓋骨と長骨数点が検出されている（Ibáñez 2008）。

第 18 層の遺構 12 は北側の一部分のみが調査されており，粘土が貼り付けられた支柱が石壁内部に埋め込まれた円形遺構である。床面には粘土が 3 回貼り付けられた痕跡があり，板石による敷石がある。また，遺構 12 は「特殊建物（Collective Building）」である可能性が指摘されているが，発掘調査が遺構の一部にとどまっているため詳細は不明である（Ibáñez 2008）。

Ⅲ．比較と検討

ギョベクリ・テペ遺跡の「特殊建物」と同様の，あるいは類似する形態的特徴を有する遺構の存在は西アジア各地で報告されているが，本稿ではギョベクリ・テペ遺跡から比較的距離の近いトルコ南東部・シリア北部において「特殊建物」の可能性が指摘されている遺跡・遺構を集成した（第 2 ～ 4 表）。

1．トルコ南東部における「特殊建物」

構造的特徴から①遺跡内の位置，②遺構の構造（半地下式か地上式か），③遺構の形状，④遺構の規模，⑤柱の位置と本数，⑥ベンチ状の高まり（ベンチ状構造物）の有無とその様相，⑦床面の状況，⑧仕切り壁の有無，⑨炉の有無，⑩埋葬の有無，⑪排水溝の有無，の観点に基づいて比較する（第 2 ～ 3 表）。これらの視点からトルコ南東部における「特殊建物」を比較検討してみたい。

①遺跡内の位置に関しては，ギョベクリ・テペ遺跡は遺跡全体が特殊な機能を有する可能性があるため例外的であるが，ネヴァル･チョリ遺跡，チャヨニュ遺跡ではそれぞれ遺跡の北西部，東部に「特殊建物」が集中しており，居住区域と「特殊建物」区域が意識的に区分されていた可能性が高い。

②遺構の構造に関しては，PPNA 期には住居も「特殊建物」も半地下式構造であることが一般的である。その一方で PPNB 期以降になると，地上式の住居と半地下式の「特殊建物」という建造方法の違いが現れる。特にネヴァル・チョリ遺跡では住居が全て地上式の方形遺構である一方で,「特殊建物」は方形でありながらも半地下式である。チャヨニュ遺跡でも「テラッゾ･ビルディング」では詳細が確認できなかったが，その他の「特殊建物」では筆者が確認できた限り半地下式構造である。

③の遺構の形状に関しては，PPNA 期の遺構は円形，PPNB 期以降の遺構は方形となる傾向が大まかにあり，これは住居と「特殊建物」の双方で確認できる。特にギョベクリ・テペ遺跡

では，「特殊建物」の形状が時期を経るにつれ「円形→隅丸方形→方形」と変化している様相が確認できる（第 2 表）。

④建物の規模に関しては，PPNA 期には直径約 2 ～ 3 mの遺構と直径約 5 ～ 6 mの遺構が検出される場合が多く，後者の中に「特殊建物」の可能性が指摘される遺構がある。特にグシル・ホユック遺跡ではギョベクリ・テペ遺跡の「エンクロージャー」と構造が類似する，上部が欠損したとみられる石柱が中央に直立する隅丸方形の「特殊建物」が検出されている。この遺構は内側の石壁から計測すると一辺が約 7 mになり，同遺跡の他の遺構よりも規模が大きい。またギョベクリ・テペ遺跡のエンクロージャー A ～ D は内径が約 8 ～ 10 mであり，規模も近似する。PPNB 期では，住居の詳細なデータのあるネヴァル・チョリ遺跡を見ると，ほとんどの住居の床面積は 100 ㎡を下回る一方で，「特殊建物」の床面積は 2 基とも約 150 ～ 190 ㎡と明らかに規模が大きく，両者の床面積には明確な差異があるといえる。一方でそのように考えると，ハラン・チェミ遺跡やキョルティック・テペ遺跡で「特殊建物」と指摘されている遺構は直径 5 ～ 6 mに達しないものが多く，床面積も他の遺跡の「特殊建物」と比較するとかなり狭い。このことから，ハラン・チェミ遺跡やキョルティック・テペ遺跡の「特殊建物」が，実際には「特殊建物」でなかった可能性がある。

⑤柱の位置と本数に関しては，「特殊建物」の大まかな柱の配置パターンとして（a）大型の T 字形石柱が遺構内部中央に（偶数単位で）規則的に配されるパターンと（b）小型の T 字形石柱が石壁付近に規則的に配されるパターンとがある。ギョベクリ・テペ遺跡の「エンクロージャー」や「特殊方形遺構」，ネヴァル・チョリ遺跡の「カルト・ビルディング」やグシル・ホユック遺跡の「特殊建物」などでは，(a) + (b) が組み合わさったパターンが多くみられる。特にギョベクリ・テペ遺跡の「エンクロージャー」では T 字形石柱が一定間隔を保って配され，遺構中央を中心として T 字形石柱が対称に配置されている。T 字形石柱から屋根の明確な痕跡は確認されていないが，屋根が崩落して覆土となった可能性があり，遺構の石壁に沿って T 字形石柱が配置された「特殊建物」については屋根を支えるための構造であったとする主張もある（例えば Banning 2011）。

⑥ベンチ状構造物に関しては，「特殊建物」から検出され，住居からは検出されない傾向がある。具体的な機能は不明であるが，しばしば板石で敷石された事例も確認されており，ギョベクリ・テペ遺跡やネヴァル・チョリ遺跡では「特殊建物」に集まった人々が座る「ベンチ」としての用途が指摘されている（例えば Dietrich et al. 2012）。

⑦床面の状況に関しては，特に「特殊建物」では床面をテラッゾに加工して彩色したり，粘土や石灰プラスターで貼り付けたり，大きく扁平な板石を敷いたり，石灰岩岩盤を掘りくぼめたりするなど，床面に対して多大な労力が投入されている事例が多い。一方で，興味深いことに小規模な遺構でも粘土やプラスターが床面に貼り付けられたり，礫が敷かれたりされている事例があり，ある程度の「床面への加工」は PPN 期における建物建築の伝統の一部であった可能性がある。

第２表　トルコ南東部における遺構（「特殊建物」・その他の遺構など）の比較一覧①

遺構名	層	時期	遺跡内の位置	半地下式	遺構			柱状構造物	ベンチ状構造物	床面		仕切り壁	炉床	埋葬		排水溝	特記事項
	（古→新）	(cal BCE)		構造有無	形状	規模(m，内径)	向き	本数(うち)	状態	状態	材質	状態	基数	基数	位置	有無	
ギョベクリ・テペ遺跡(PPNA～PPNB前期の遺跡)：「特殊建物」																	
エンクロージャーA	第Ⅲ層	約9170～8310	南部(主要発掘区)	●	隅丸方形？	8×6？(≒48㎡？)	南東方向	6	約3m(隙間 Pillar1～2)	ー	ー	×	×	×	×	×	南東部に「U字石」
エンクロージャーB	第Ⅲ層	ー	南部(主要発掘区)	●	(楕)円形	最小8～10(≒50～79㎡)	南方向	11 (中央2)	ー	テラッゾ(再建築時？)	石灰プラスター＋石灰岩	×	×	×	×	●	石製容器，石柱台座
エンクロージャーC	第Ⅲ層	約9260～8940	南部(主要発掘区)	●	(楕)円形	最小10(≒79㎡) 最大約30？(≒707㎡？)	南方向	21 (中央2)	遺構内周全体 (南部除く)	岩盤削り出し(台座含む)	石灰岩	×	×	×	×	×	南部に「U字石」岩盤の石柱台座
エンクロージャーD	第Ⅲ層	約9660～8760	南部(主要発掘区)	●	(楕)円形	最小10～15(≒79～177㎡)	南方向	13 (中央2)	遺構内周全体	岩盤削り出し(台座含む)	石灰岩	×	×	×	×	×	
エンクロージャーE	層序不明	ー	南西部	●	隅丸方形	8～10(≒50～79㎡)	ー	中央2？	遺構内周全体	岩盤削り出し	石灰岩	×	×	×	×	×	別称“Rock Temple”
エンクロージャーF	層序不明	ー	南部(主要発掘区)	●	円形	約10(≒79㎡)	ー	8 (中央2)	遺構内周全体	ー	ー	×	×	×	×	×	エンクロージャーBと同規模
エンクロージャーG	層序不明	ー	南部(主要発掘区)	ー	隅丸方形？	ー	ー	2	ー	ー	ー	×	×	×	×	×	
エンクロージャーH	層序不明	約9100～8350	西部	●	円形？	約10(≒79㎡)	ー	7？ (中央2？)	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	●	
ライオンピラー・ビルディング	第Ⅱ層	約8240～7790	南部(主要発掘区)	●	方形	6×4(≒24㎡)	東ー西？	6	約2m(隙間 Pillar I～II)	テラッゾ	石灰プラスター＋石灰岩	×	×	×	×	×	絶対年代(cal BCE)は遺跡廃棄時
ネヴァル・チョリ遺跡(PPNB前期～中期の定住集落)：「特殊建物」																	
カルト・ビルディング Ⅱ	第Ⅱ層	ー	北西部	●	方形	13.9×13.5(≒188㎡)	南東or 南西方向？	9(中央1)＋柱穴2以上？	石柱間に石板遺構内周全体	テラッゾ，白色プラスター層上に彩色(黒・赤)	石灰プラスター＋石灰岩	×	×	×	×	×	House 13A(未調査)の再建築，遺構中央に柱穴
カルト・ビルディング Ⅲ	第Ⅲ～Ⅳ層	ー	北西部	●	方形	12.1×12.8(≒155㎡)	南西方向？	3＋柱穴8以上？	石柱間に石板遺構内周全体	テラッゾ，カルト・ビルディングⅡの床面を継続使用	石灰プラスター＋石灰岩	×	×	×	×	×	カルト・ビルディングⅡの再建築，彫像数点埋め込み＋石壁へ再利用
ネヴァル・チョリ遺跡(PPNB前期～中期の定住集落)：「その他の遺構」																	
住居21A	第Ⅰ層	ー	南東部	×	方形	11.3×4.5(≒51㎡)	南西ー北東	×	×	ー	ー	前室2 主室6	×	6	床下	●	頭骨5，長骨数本
住居25	第Ⅰ層	ー	北西部	●	方形	13.25×5.4(≒72㎡)	南ー北	礎石3	×	ー	ー	前室1 主室4～6	×	2	床下	●	外壁より1.1mに礎石，頭部欠損人骨1
住居12	第Ⅱ層	ー	南東部	●	方形	12×5.3(≒64㎡)	南西ー北東	礎石11	×	ー	ー	●	×	×	×	●	外壁より約1mに礎石
住居21B	第Ⅱ層	ー	中央部	×	方形	12.7×6.4(≒81㎡)	南西ー北東	×	×	ー	ー	前室4 主室6	×	4	床下	●	住居21Aの再建築，女性人骨1(原位置)
住居26	第Ⅱ層	ー	中央部	●	方形	18.2×6.2(≒113㎡)	南西ー北東	礎石若干	×	ー	ー	前室1 主室8	×	×	×	●	床面，礫層上にプラスター層
住居3	第Ⅲ層	ー	南西部	×	方形	8.1×5.4(≒44㎡)	南西ー北東	×	×	ー	ー	前室1 主室2～6	×	1	床下	●	一部浸食
住居2	第Ⅲ層	ー	南西部	×	方形	15.6×6.15(≒96㎡)	南西ー北東	×	×	ー	ー	前室1 主室10	×	12	床下	×	墓1基で欠損頭部に丸石
住居6	第Ⅲ層	ー	中央部	×	方形	約15×5(≒75㎡)	南西ー北東	×	×	ー	ー	複数分割	3	3	床下	●	住居＋工房→工房のみ
住居7	第Ⅲ層	ー	中央部	×	方形	14.3×6(≒86㎡)	南西ー北東	×	×	ー	ー	前室2 主室9	×	4	仕切り壁内部	×	
住居10	第Ⅲ層	ー	中央部	×	隅丸方形？	4.1×3.8(≒16㎡)	南西ー北東	×	×	ー	ー	2室	×	×	×	×	
住居16	第Ⅲ層	ー	北西部	●	方形？	9×6.1(≒55㎡)	南ー北	6(痕跡)	×	ー	ー	●	×	×	×	●	外壁から1mに支柱痕
住居15	第Ⅲ層	ー	北西部	×	方形？	ー	東ー西	×	×	ー	ー	●	×	×	×	×	住居22の再建築
住居4	第Ⅳ層	ー	ー	×	方形？	12×8(≒96㎡)	南西ー北東	×	×	ー	ー	●	×	若干	床下	●	住居2or7に類似

凡例　●：あり　×：なし　ー：言及なし，データ不足

第３表　トルコ南東部における遺構（「特殊建物」・その他の遺構など）の比較一覧②

遺構名	層	時期	遺跡内の位置	半地下式	遺構			柱状構造物	ベンチ状構造物	床面		仕切り壁	炉床	埋葬		排水溝	特記事項
	（古→新）	（cal BCE）		構造有無	形状	規模（m，内径）	向き	本数（うち）	状態	状態	材質	状態	基数	基数	位置	有無	
チャヨニュ遺跡（PPN期を通じた定住集落）：「特殊建物」																	
フラッグストーン・ビルディング（FA）	Channelled Building層	PPNB前期	東部	●	方形	約10×7？（≒70㎡？）	東ー西？	3？（中央2）	●	床面に敷石	ー	×	×	×	×	×	遺構南側が浸食
スカル・ビルディング（BM1）	Channelled Building層	PPNB前期	東部	●	円形	直径約6.5？（≒33㎡？）	ー	2？（壁柱2）	×	**粘土の貼り付け**	粘土	×	×	2	床下	×	遺構南側が浸食，骨（オーロックス）頭骨15，頭部欠損人骨
スカル・ビルディング（BM2）	Cobble-Paved Building層	PPNB中期	東部	●	方形	約8.7×5.8？（≒50㎡）	南ー北	ー	ー	ー	ー	移動可能空間あり	×	ー	室内床下	×	人骨450～600個体分（頭骨・長骨・頭部欠損人骨），BM1建築材放棄
テラッゾ・ビルディング	Cell Building層	PPNB後期	東部	ー	方形	約11×8？（≒88㎡）	南西ー北東	×	×	テラッゾ	石灰プラスター＋赤・白色石灰岩片	×	1	×	×	×	床面に石灰岩片で表現された4本線（線刻）
グシル・ホユック遺跡（PPNA期の定住集落）：「特殊建物」																	
隅丸方形「特殊建物」	最上層	ー	中央部	ー	隅丸方形	約7×7（≒49㎡）	ー	中央1	ー	未完掘	ー	×	ー	ー	ー	ー	中央に直立石板1，遺構西側に広場
グシル・ホユック遺跡（PPNA期の定住集落）：「その他の遺構」																	
遺構（全1基）	第３層	ー	南西部	●	円形？	直径約4（≒13㎡）	ー	ー	遺構中央隅丸方形	部分的な石板の敷き詰め	ー	ー	ー	ー	ー	ー	湖岸側浸食，中央に石板
遺構（全3基）	第２層	ー	ー	●	円形	直径約2.5（≒5㎡，2基） 直径約5（≒19㎡，1基）	ー	ー	ー	未完掘	ー	ー	ー	ー	ー	ー	
ハラン・チェミ遺跡（PPNA期の定住集落）：「特殊建物（？）」																	
「特殊建物」（2基分）	第１層	ー	ー	●	円形	直径約5～6（≒20～28㎡）	ー	×	石壁内側の一部に沿う	黄砂＋プラスターの複数回貼り付け	ー	×	ー	ー	ー	ー	1基より頭骨（オーロックス）検出
ハラン・チェミ遺跡（PPNA期の定住集落）：「その他の遺構」																	
「C字型」遺構	第３層	ー	ー	×	円形？（C字）	直径約2（≒3㎡）	ー	×	×	ー	ー	×	ー	ー	ー	ー	集落中央に直径約15mの広場
遺構（4基分）	第２層	ー	ー	×	ー	最大直径4（≒13㎡）	ー	×	×	3基で石板を敷く	砂岩製石板（3基）	×	●	ー	ー	ー	炉床検出は1基のみ
「C字型」遺構（2基分）	第１層	ー	ー	×	円形？（C字）	直径約2.5（≒5㎡）	ー	×	×	ー	ー	×	ー	ー	ー	ー	
キョルティック・テペ遺跡（PPNA期の定住集落）：「特殊建物（？）」																	
遺構Y3	ー	ー	ー	●	円形	直径約3.45m（≒9㎡）	ー	ー	ー	**粘土の貼り付け**	粘土	ー	ー	ー	ー	ー	床面から頭骨・角（野生ヤギ）検出
遺構Y11	ー	ー	ー	●	円形	直径約3.42m（≒9㎡）	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	
遺構Y44	ー	ー	ー	●	円形	直径約3.8m（≒11㎡）	ー	ー	ー	**粘土の貼り付け**	粘土	ー	ー	ー	遺構内	ー	床面から頭骨・角（野生ヤギ）検出
キョルティック・テペ遺跡（PPNA期の定住集落）：「その他の遺構」																	
遺構（計86基）	ー	ー	ー	●	円形	直径約2.3～3（≒4～7㎡）	ー	ー	ー	**粘土の貼り付け**	粘土	ー	ー	複数	ー	ー	その他の遺構
遺構*（計29基）	ー	ー	ー	ー	円形	直径約1.1～2.1（≒0.9～3.5㎡）	ー	×	ー	礫（河原石）の敷き詰め	礫（河原石）	×	ー	×	×	ー	床面から植物遺存体検出，貯蔵穴？

凡例　●：あり　×：なし　ー：言及なし，データ不足

第４表　シリア北部における遺構（「特殊建物」）の比較一覧

遺構名	層	時期	遺跡内	半地下式	遺構			柱状構造物			ベンチ状構造物		床面		仕切り壁			炉床		埋葬				排水溝	特記事項
	（古→新）	（cal BCE）	の位置	構造有無	形状	規模（m，内径）	向き	有無	本数（本）	有無	状態	状態	材質	有無	材質	状態	有無	基数	有無	位置	基数	出土人骨	有無	
ジェルフ・エル・アフマル遺跡（PPNA～PPNB前期の定住集落）：「特殊建物」																									
遺構EA7a	第Ⅱ層	9400～9100？	東部高台	●	円形	直径約7（≒38㎡）	―	●	柱穴19	●	遺構北側	―	―	●	葉巻石（石灰岩）	壁沿いに2室分割	×	―	●	柱穴	―	頭骨1	×	焼失，遺構南西側欠損，穀物貯蔵庫？
遺構EA7b	第Ⅰ層	9400～9100？	東部高台	●	円形	直径約8（≒50㎡）	―	●	元の柱穴7＋追加柱穴12	●	遺構北側	―	―	●	葉巻石（石灰岩）	壁沿いに2室分割	×	―	●	柱穴（EA7a由来）	―	頭骨1	×	遺構EA7aの再建築，遺構一部欠損，穀物貯蔵庫？
遺構EA30	第Ⅱ層	9218～8605	西部高台	●	円形	直径約7（≒38㎡）	―	●	残存木柱13（うち焼失8）	●	遺構北西側２箇所	―	―	●	葉巻石（石灰岩）	壁沿いに7室分割	×	―	―	遺構中央床面	―	若年女性（頭部欠損）	×	遺構焼失（焼失木材検出），人骨の意図的な放棄？，ムレイベト遺跡遺構47との構造的類似性
遺構EA53	第ーⅡ層	9308～8484	東部高台	●	円形	直径約7（≒38㎡）	―	●	焼失木柱3＋未焼失2＋不明1＋柱穴26（壁柱穴）	●	遺構内周全体（西部除く）	**粘土プラスターの貼り付け**	礫，粘土プラスター	×	―	―	×	―	×	―	―	―	×	遺構内部を粘土で貼り付け
テル・アブル３遺跡（PPNA期の定住集落）：「特殊建物」																									
遺構M10b	第Ⅰ層	9291～8924	北発掘区ー北西部	●	円形	直径約8（≒50㎡）	―	●	柱穴5	●	遺構北側	**粘土の貼り付け**	粘土プラスター	×	―	―	×	―	×	―	―	―	×	焼失，石像（人面像），石製品
遺構M10a	第０層	―	北発掘区ー北西部	●	円形	直径約7（≒38㎡）	―	●	柱穴1	×	―	**粘土の貼り付け**	粘土プラスター	●	葉巻石（石灰岩）	壁沿いに4～5室分割	●	1	×	―	―	―	×	M10bの再建築，角・骨（オーロックス）
遺構M1b	第Ⅱ層	―	南発掘区ー北東部	●	円形	直径約6（≒28㎡）	―	●	柱穴16以上？	●	遺構北・南側	植物繊維が混和された粘土の貼り付け	粘土＋植物繊維	×	―	―	●	1	×	―	―	―	×	動物骨の堆積，骨（オーロックス）
遺構M1a	第Ⅰ層	9252～8837	南発掘区ー北東部	●	円形	直径約7.9（≒49㎡）	―	●	柱穴12以上？	●	遺構中央・南東・北西側	植物繊維が混和された粘土の貼り付け	粘土＋植物繊維	×	―	―	●	1	●	遺構内部	―	指骨，大腿骨	×	M1bの再建築，動物骨，二次葬？ライムギ種子検出，貯蔵庫？
遺構M3	第０層	―	南発掘区ー南西部	●	円形	直径約7.5（≒44㎡）	―	●	柱穴12	●	遺構北・南側	植物繊維が混和された粘土の貼り付け	粘土＋植物繊維	●	葉巻石（石灰岩）	壁沿いに2～3室分割	●	2	×	―	―	―	×	ドア軸受検出，遺構内部にドア？
遺構B2	層序不明	―	南発掘区ー南西部	●	円形	直径約10～12（≒79～113㎡）	―	●	柱穴4以上？	●	遺構内周全体	**粘土の貼り付け**	粘土プラスター	×	―	―	●	1	×	―	―	―	●	大部分が浸食（湖岸），石板（動物図像有りも）
ムレイベト遺跡（PPNA～PPNB中期の定住集落）：「特殊建物」																									
遺構47	第14a層	10174～9140 9105～8615	―	●	円形	直径約6（≒28㎡）	―	●	柱穴20前後？	●	遺構北側	**粘土の貼り付け**	泥	●	石材，木材	壁沿いに7室分割	●	1	―	―	―	―	―	ジェルフ・エル・アフマル遺跡遺構EA30との構造的類似性
遺構21bis	第15b層	―	―	―	円形？	直径約5？（≒20㎡？）	―	―	―	―	―	**粘土の貼り付け**	泥	●	―	―	―	―	―	―	―	―	―	
遺構21	第15c層	―	―	―	円形？	直径約5.7？（≒26㎡？）	―	―	―	―	―	**粘土の貼り付け**	泥	●	石灰岩	部分的に残存	●	1	●	仕切り壁付近，炉床直下	―	頭骨，長骨数本	―	未完掘，二次葬？
遺構12	第18層	―	―	―	円形？	―	―	●	柱穴3以上？	―	―	**粘土の貼り付け，敷石**	泥，石板	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	未完掘

凡例　●：あり　×：なし　―：言及なし，データ不足

⑧仕切り壁に関しては，ネヴァル・チョリ遺跡など住居では仕切り壁が検出されているものの，「特殊建物」においては，仕切り壁はチャヨニュ遺跡「コブル・ペーブド・ビルディング」層の「スカル・ビルディング（Skull Building（BM2））」を除いて検出されていない。さらにエリム＝オズドアンによれば「スカル・ビルディング」の 2 基（BM1・BM2）はどちらも住居から「特殊建物」へ転用されている（Erim-Özdoğan 2011）とのことで，これも除外されるとなると本稿で集成した「特殊建物」全てで仕切り壁は検出されていないことになり，トルコ南東部においては「仕切り壁の欠如」を「特殊建物」の条件の 1 つとしてみなせる可能性がある。

⑨炉に関しては，チャヨニュ遺跡の PPNB 後期に相当する「セル・ビルディング」層の「テラッゾ・ビルディング」を除いて「特殊建物」では検出されていない。

⑩埋葬に関しては，シュミットはギョベクリ・テペ遺跡の「エンクロージャー」の覆土から人骨片が検出されたことを報告しており（Schmidt 2010），実際に頭蓋骨片も検出されている（Gresky et al. 2017）が，同遺構から埋葬事例は確認されていない。他の「特殊建物」における埋葬事例ではチャヨニュ遺跡の「スカル・ビルディング」の 2 基（BM1・BM2）から大量の人骨が確認されているが，頭蓋骨や長骨といった特定部位を埋葬する二次葬であり，原位置を保った一次葬の事例は確認されていない。特にネヴァル・チョリ遺跡では，住居の床下や仕切り壁内部からしばしば一次葬の墓が検出される一方，「特殊建物」からは一切検出されていない。

⑪排水溝と思われる溝に関しては，ギョベクリ・テペ遺跡の「エンクロージャー」から排水溝らしき溝が床面から検出されており，「エンクロージャー」のような「特殊建物」にも屋根が掛けられ，建物の長期的な機能維持を目的として排水システムである溝が整備された可能性がある。またワディ・フェイナンの WF16 の大規模な溝の存在を積極的に考慮すれば，溝が何らかの儀礼行為と関係した可能性も考えられる。

以上をまとめると，トルコ南西部における「特殊建物」の特徴として，遺構が遺跡（内）の特別な位置にあること，直径または一辺が 6 m以上の大規模な円形・方形遺構であること[20]，遺構内部にベンチ状構造物が存在すること，精巧な床面の加工，仕切り壁の欠如，炉と墓（一次葬）の欠如，の 6 点が挙げられる。これらの特徴から考慮すると，遺構データが一部不足している遺構もあるものの，ギョベクリ・テペ遺跡，ネヴァル・チョリ遺跡，チャヨニュ遺跡の「フラッグストーン・ビルディング（FA）」「テラッゾ・ビルディング」のような「特殊建物」ではこれらの特徴で共通する点が比較的多く，同じくチャヨニュ遺跡の古い円形の「スカル・ビルディング（BM1）」と新しい方形の「スカル・ビルディング（BM2）」とは共通点が少ないことがわかる。その要因としては，前述したように「スカル・ビルディング」は本来「特殊建物」として計画された遺構ではなく，一般的な住居の「特殊建物」への転用が影響していると考えられる。一方で，PPNA 期のハラン・チェミ遺跡，キョルティック・テペ遺跡，グシル・ホユック遺跡では，本項で整理した「特殊建物」の特徴に該当する要素が少ない。その理由として，遺跡や遺構のデータ不足で遺構間での（同一条件下の）正確な比較ができていない可能性，これらの遺構がそもそも「特殊建物」でない可能性，「特殊建物」の構造の変化あるいは地域

による差異を反映している可能性が考えられる。特に「特殊建物」構造の変化について，PPNA 期から PPNA ～ PPNB 期の過渡期にかけて「特殊建物」の大型化あるいは建築様式の複雑化があり得る。また「特殊建物」構造の地域による差異について，例えばハラン・チェミ遺跡，キョルティック・テペ遺跡，グシル・ホユック遺跡の「ティグリス河流域圏」とギョベクリ・テペ遺跡，ネヴァル・チョリ遺跡，ティグリス河流域であるけれどもチャヨニュ遺跡の「ユーフラテス河流域圏」という 2 つの「地域圏」を設定できる可能性がある。興味深いことに，チャヨニュ遺跡からはギョベクリ・テペ遺跡やネヴァル・チョリ遺跡から出土した人面表現に類似した図像が検出されており，ユーフラテス河流域との文化的な関連性を示唆している。またグシル・ホユック遺跡の遺構は前述の「特殊建物」の特徴に該当する要素が少ないにもかかわらず，最上層の隅丸方形の「特殊建物」は遺構中央から石柱が直立した状態で検出され，プランがギョベクリ・テペ遺跡の「エンクロージャー」と類似しており，ティグリス河上流地域では特異な存在である。

2．シリア北部における「特殊建物」

ここでは，シリア北部の遺跡から検出された「特殊建物」について，前節と同様の観点から比較を行う（第 4 表）。

①遺跡内の位置に関しては，ジェルフ･エル･アフマル遺跡では基本的に住居集中区域内に「特殊建物」が位置しており，住居域と「特殊建物」区域のような空間的区分は確認できなかった。テル・アブル 3 遺跡においても同様に，北発掘区西部から検出された遺構 M10a・M10b を除き，住居と「特殊建物」が混在して分布しており，両者の空間的な区分は確認できなかった。ムレイベト遺跡では発掘調査面積が狭小で，確認できた 2008 年時点までの発掘成果からは分布域の区分の有無を判断することができなかった。したがって，少なくともこれら 3 遺跡においては，トルコ南東部の遺跡のような特定の場所に「特殊建物」が建造されるという状況は認められないと評価することができる。

②遺構の構造に関しては，検討した 3 遺跡の時期が全て PPNA ～ PPNB 前期であるが，テル・アブル 3 遺跡とムレイベト遺跡では住居と「特殊建物」の両者で半地下式構造が傾向として確認でき，PPNA 期の建築伝統に概ね則っていたと評価できる。一方でジェルフ・エル・アフマル遺跡では，他の 2 遺跡とは異なり，時期を経て PPNA 期の末期へ向けて地上式構造が出現する傾向が住居において確認できた。なお「特殊建物」ではジェルフ・エル・アフマル遺跡でも半地下式構造を維持し続ける傾向がある。

③遺構の形状に関しては，円形プランという PPNA 期の建築伝統に概ね則っているが，ジェルフ・エル・アフマル遺跡の住居では PPNA 期であってもその末期へ向けて円形から方形へ，あるいは仕切り壁の出現や複数遺構の接続による単室から複室へと，住居構造の方形化・複雑化の過程が確認できる。一方で，住居構造が変化するに伴って，「特殊建物」は仕切り壁の出現により単室から複室へと複雑化を遂げつつ，遺跡廃棄直前の最終層である PPNA 期～ PPNB

期の移行期に至るまで遺構の形状は円形を維持し続けた。

④遺構の規模に関しては，シリア北部の PPNA 期の遺構は直径 3 ～ 4 m と直径 5 ～ 6 m以上の規模であることが多く，後者のほとんどで「特殊建物」であった可能性が指摘されている。トルコ南東部の事例と比較すると，「特殊建物」では直径 10 m以上の遺構は確認できず，その規模に一定のまとまりがあるように思える。

⑤柱の位置と本数に関しては，「特殊建物」における大まかな柱配置パターンとしては（a）直径の大きい木柱が遺構内部に（しばしば偶数単位で）規則的に配されるパターンと（b）直径の小さい木柱が石壁に埋め込まれて不規則的に配されるパターンがある。例えば，テル・アブル 3 遺跡の遺構 B2 は恐らく（a），同遺跡の遺構 M1b は（b），ジェルフ・エル・アフマル遺跡の遺構 EA53 は（a）＋（b）のパターンに該当する。住居では石壁に柱が埋め込まれる事例が認められるものもあるが，石壁のみでそもそも柱穴を有さない事例が多い。石柱は確認されておらず，柱穴と炭化材がしばしばセットで検出されることから，木柱が多数配置されていた可能性が高い。T 字形石柱はシリア北部の 3 遺跡では一切確認されず，この地域では「特殊建物」の構成要素となっていなかったと考えられる。

⑥ベンチ状構造物に関しては，「特殊建物」から部分的に検出される事例がある。ジェルフ・エル・アフマル遺跡の遺構 EA53 やテル・アブル 3 遺跡の遺構 B2 では遺構内周を全周する（可能性がある）ベンチ状構造物が検出されており，トルコ南東部のギョベクリ･テペ遺跡やネヴァル・チョリ遺跡の「特殊建物」との類似が認められる。このことから，遺構 EA53，遺構 B2 においては「特殊建物」に集まった人々が座る「ベンチ」として機能していた可能性がある。

⑦床面の状況に関しては，トルコ南東部の事例とは反対に「特殊建物」であっても床面に対して多大な労力が投入され特別な加工がされた事例はほとんどない。具体的には粘土の貼り付け程度であり，建築様式の違いもさることながら，入手可能な建築材の違いが床面への加工の度合いに影響している可能性がある。

⑧仕切り壁に関しては，これもトルコ南東部の事例とは異なり PPNA 期から既に仕切り壁による内部の分割が確認できる。シリア北部において「仕切り壁の欠如」は「特殊建物」を認定する際の要件となり得ず，この地域の特徴として位置付けられる可能性がある。

⑨炉に関しては，ジェルフ･エル･アフマル遺跡の全ての「特殊建物」で炉は検出されていない。また，テル・アブル 3 遺跡の「特殊建物」では遺構 M10b のみ，ムレイベト遺跡の「特殊建物」では遺構 12 のみ炉が検出されていない。このことから，シリア北部の 3 遺跡において「特殊建物」内部は同様に仕切り壁で分割されてはいるものの，実際の性格は遺跡ごとに多少異なっていた可能性がある。例えば，炉のない遺構では長期的な貯蔵庫，炉のある遺構では（饗宴のための）食料などの調理機能を兼ねた短期的な保管所などが想定できよう。さらには，炉の実用的な機能だけでなく，炉が有する象徴性も考慮する必要がある。

⑩埋葬に関して，ジェルフ・エル・アフマル遺跡の遺構 EA7a・b とテル・アブル 3 遺跡の遺構 M1a から人骨の一部分が検出されており，「特殊建物」での二次葬行為の可能性を示唆して

いる。これを積極的に評価するならば，二次葬された頭蓋骨と長骨のみが大量に検出された，同じく「死」の概念を連想させるチャヨニュ遺跡の「スカル・ビルディング（BM1・MB2）」と類似する機能を有していた可能性を考えることができよう。また，公共的な性格を有する「特殊建物」で二次葬を行うことで，家族・親族集団に強い結び付きをもって所属していた死者を集落全体に属する（他と区別できない）「祖先･祖霊の一部」として「祖先化」させる意図もあったかもしれない。ちなみに，住居の床下や壁際への死者の埋葬行為はPPN期の西アジアでは広く確認される事例であり，ネヴァル・チョリ遺跡においても本稿で集成した住居13基のうち住居8基から床下あるいは壁際（内部）から複数の墓（一次葬）が検出されている。

⑪排水溝らしき施設に関して，シリア北部からはテル・アブル3遺跡の遺構B2においてのみ排水溝らしき溝が床面から検出されており，建物の長期的な機能維持が目的の排水システムとして整備された可能性や，儀礼祭祀の際に何らかの形で利用された可能性などが考えられる。

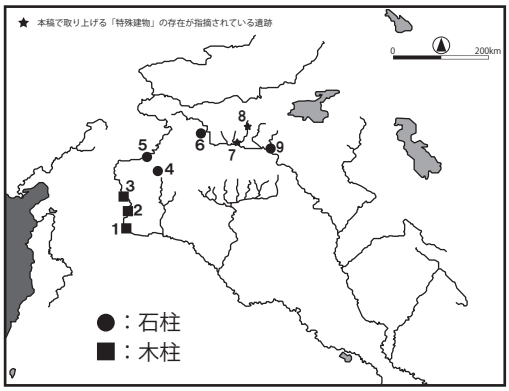
以上をまとめると，シリア北部における「特殊建物」の特徴の共通点として，直径または一辺が6ｍ以上の大規模な円形･方形遺構であること，遺構内部にベンチ状構造物が存在すること，の2点が挙げられる。またトルコ南東部の事例と異なり，精巧な床面の加工，仕切り壁の欠如，炉と墓（一次葬）の欠如は遺構によってまちまちであった。このことから，トルコ南東部とシリア北部の「特殊建物」については，単室と仕切り壁による複室といった形状の違いだけでなく，床面への加工の程度や植物資源の保管，二次葬行為に伴う人骨の特定部位の埋葬といった「特殊建物」内部の状況の違いも傾向として見出すことができる。特に「特殊建物」に関して，トルコ南東部ではほとんど検出されない炉がシリア北部では比較的多く検出されているという点は，炉の実用的・象徴的機能を「特殊建物」と関連させて考察する上で，非常に興味深い示唆であると考える。

3．トルコ南東部・シリア北部における「特殊建物」の比較

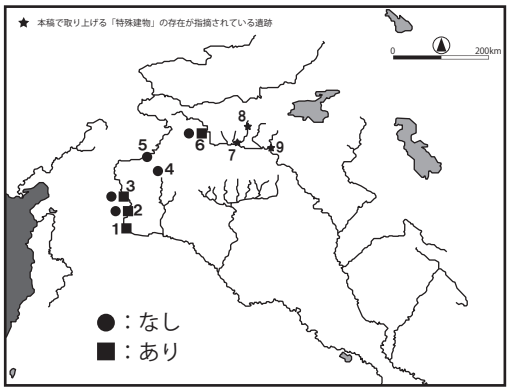
トルコ南東部･シリア北部の「特殊建物」の共通点として以下が挙げられる。半地下式構造で，直径または一辺が6ｍ以上の大規模な円形・方形遺構であり，遺構内部にベンチ状構造物を有する，という3点であり，これらは「特殊建物」の特徴の1つであるといえる。一方で，構造的な相違点として，遺構の柱の材質，仕切り壁の有無，遺構内部の炉の有無，遺構内部の墓の有無，が挙げられる。本稿では「遺構の柱が石製／木製の場合」「仕切り壁を有さない／有する場合」「炉を有さない／有する場合」「墓を有さない／有する場合」で区分し，その地理的な分布傾向を見出すことを試みる。なお，比較対象の「特殊建物」は上記の区分要素4点が全て確認できた遺構のみに限定する（第2～5図）。

(1) 遺構の柱の材質による分布（第2図）

この要素ではトルコ南東部の石柱を有する遺構とシリア北部の木柱を有する遺構に区分できる。この差異の背景としては「特殊建物」に対する建築様式の違い，あるいは入手可能な建築材の違いが考えられる。



第 2 図　遺構の柱の材質による分布



第 3 図　仕切り壁の有無による分布

(2) 仕切り壁の有無による分布（第 3 図）

この要素では内部空間が広く確保できる遺構と仕切り壁によって内部空間が細かく分割される遺構に区分できる。この差異の背景としては「特殊建物」における内部空間の利用方法の違いが考えられる。例えば前者は当時の人々の「集会場」として，後者は「貯蔵庫」として想定することが可能であろう。

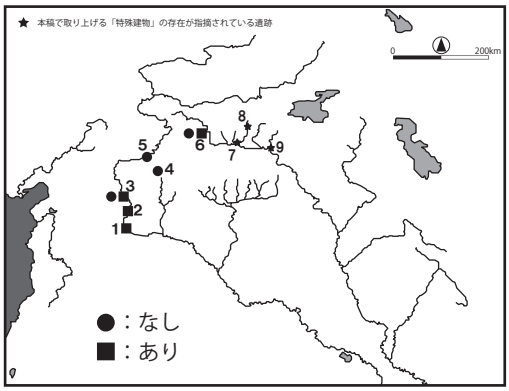
(3) 炉の有無による分布（第 4 図）

この要素では内部に炉がない遺構と炉がある遺構に区分できる。また炉は住居，広場のような野外からもしばしば検出されることから，炉を遺構内部に有する「特殊建物」は当時の人々の「日常」と近い距離に位置付けられていた可能性，あるいは調理や食料・ご馳走の振る舞いを伴う「饗宴」と関係していた可能性がある。

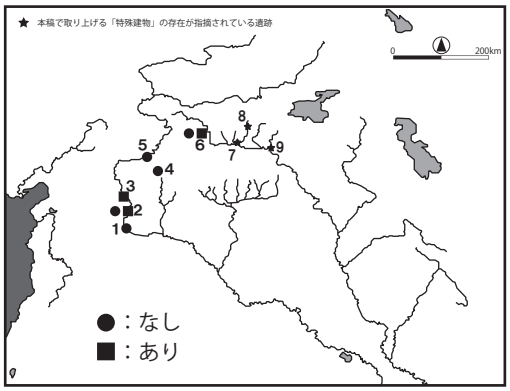
(4) 墓の有無による分布（第 5 図）

この要素では内部で墓や人骨が検出された遺構と墓や人骨が検出されない遺構に区分できる。地域や河川の流域による差異はあまりみられないことから，「特殊建物」が立地する地域や河川流域に関わらず，遺構内部に墓（一次葬）が作られる「特殊建物」は少なく，比較的例外的な事例であることが確認できる。遺構内部から検出される人骨には「頭蓋骨＋長骨」のみなど，特定部分に偏った組み合わせが特徴的であることから，「特殊建物」は二次葬に利用された傾向があるといえる。一方で本項の要素には該当しない遺構中央床面で頭蓋骨を欠損した人骨が検出されたジェルフ・エル・アフマル遺跡の遺構 EA30 の事例は，通常の埋葬ではなく意図的に放棄された可能性が指摘されており（Stordeur 2015），「特殊建物」という公共建造物としての建物の性格が通常の埋葬と異なる死者への扱いがなされたことと関係している可能性がある。

以上，「特殊建物」の相違点として前述した（1）～（4）の区分要素から「特殊建物」の分



第 4 図　炉床の有無による分布



第 5 図　墓の有無による分布

布傾向を見出すことを試み，分布図を示した。将来的に遺跡・遺構のデータ量が増加してそれらが利用できるようになれば「特殊建物」の遺跡（内）の位置も分類に加えられるようになり，遺跡内における「特殊建物」の位置づけも含めてより詳細かつ明確な分布傾向の検討が可能になると考える。

Ⅳ．トルコ南東部・シリア北部における「特殊建物」の性格

ギョベクリ・テペ遺跡の「エンクロージャー」に対する解釈には，主に図像表現の観点から①狩猟採集民集団による「死」の概念と関連する儀礼などの祭祀施設（Peters and Schmidt 2004），②人間と動物が精神体として邂逅する場（Busacca 2017），③初期定住集落の共同体を維持するための施設（Hodder and Meskell 2011），④シャーマンのような人間集団を導く「支配者」のための権力装置（Benz and Bauer 2013），⑤動物の野生的で捕食（肉食）的な性質を規定し，明確化する場（Boric 2013），⑥当時の人々による特定の動物の分類群を研究・教育する場（Yeşilyurt 2014）といった解釈がある。これらの解釈を踏まえつつトルコ南東部・シリア北部における「特殊建物」の機能の解釈を考察する際，筆者は「特殊建物」の性格として以下の 4 点を可能性として考える。

第一には，当時の一般的な住居よりも規模が大型で内部にベンチ状構造物を有することから，当時の人々が集まる「集会場」としての性格である。特にギョベクリ・テペ遺跡の「エンクロージャー」やネヴァル・チョリ遺跡の「カルト・ビルディング」，ジェルフ・エル・アフマル遺跡の遺構 EA53 のように遺構内部で石壁に沿ってベンチ状構造物が配置されている「特殊建物」では，内部面積の広さから少なくとも住居よりは大勢の人々が集うことが可能である。あるいは大人数が収容できる公共的性格を有する「特殊建物」の利用を何らかの方法で敢えて制限することで，少人数での独占によって「権威・権力」を生み出そうと試みることも可能であっただろう。その場合「特殊建物」は人間集団を指導・統率する「力の源泉」として利用された可

能性も想定できよう。例えば世界各地の民族事例の集成・検討からヘイデン（B. Hayden）が主張したように，一部の限られた社会階級である「エリート層」によって権威・権力や利益を獲得するために「特殊建物」が私的目的で利用された可能性も否定できない（Hayden 2014）。仮にこのような解釈を肯定的に評価するならば，現在公共建造物として解釈されている「特殊建物」が，PPN 期当時には建前上公共的側面が強調されつつも実際には当時の社会における「エリート層」が自身の利益を追求するため，一部の人々の私的目的のための建物であった可能性も考えられる。この場合，人間社会における「権威･権力」の起源や発生といったテーマと「特殊建物」は密接に関係してくることになる。

第二には，特定の人間集団の紐帯を維持し，あるいは強化する「象徴的建物（ランドマーク）」としての性格である。屋内という閉鎖空間で心理的に圧迫されつつ何かしらの行動を協働して行うことは，参加者の一体感と心理的紐帯を生み出す。あくまでも可能性の 1 つではあるが，例えば「特殊建物」で祖先崇拝のような祭祀を行えば参加者の心理的紐帯や血縁的・地縁的な人間集団への帰属意識などの社会的結束をより高めることが可能である。また「特殊建物」で大勢の人々が参加して食料やご馳走が振る舞われる饗宴が行われれば，例えば「特殊建物」や T 字形石柱築造のための労働力の招集や建設期間中・終了後の労働関係者への労い，終了した労働への対価の支払いを行うことができ，祭祀と饗宴を組み合わせればコストに見合う絶大な効果が期待できよう。

第三には，ストーダー（D. Stordeur）やヤルタ（T. Yartah）も一部の「特殊建物」で指摘している（Stordeur 2015, Yartah 2013），集落の物品や食料を貯蔵する「貯蔵庫」としての性格である。物を専門に保管する貯蔵庫を建築すれば集落で大量の物資が管理できるようになり，また将来に備えた長期的な貯蔵（特に植物資源）ができるようになる。ジェルフ・エル・アフマル遺跡の遺構 EA7a・b，テル・アブル 3 遺跡の遺構 M1a での植物遺存体の検出はまさにその実例であると考える。

第四には，死者や祖先，狩猟採集社会の儀礼に関連する「儀礼祭祀施設」としての性格である。特にその中の 1 つとして「ただ 1 人の個人」から「有象無象の集団構成員」への転換を促す役割がある。これは生者だけでなく死者も対象となり得る。例えばチャヨニュ遺跡の「スカル・ビルディング」やジェルフ・エル・アフマル遺跡の遺構 EA7a・b，テル・アブル 3 遺跡の遺構 M1a では選択的に選ばれた人骨の一部のみを埋葬する二次葬が確認されており，特に「スカル・ビルディング」では約 600 個体分もの人骨の一部が集中的に埋葬されている [17)]。このことは死者の「祖先化・祖霊化」を意図した行為であったと解釈することが可能であろう。その意味ではギョベクリ・テペ遺跡の「エンクロージャー」の堆積物中で検出された人骨片も死者の「祖先化・祖霊化」の一環と考えることも可能である。また「特殊建物」廃棄時に意図的に埋められたと考える堆積物の中には人工物や動物骨が含まれており，儀礼祭祀の過程で故意に破壊された遺物や饗宴を伴う儀礼祭祀，饗宴での食事などで生じた動物骨が廃棄された可能性も考えられる。

以上を踏まえ，筆者が特に関心を抱いた点は，ジェルフ・エル・アフマル遺跡の遺構 EA7a・b, テル･アブル 3 遺跡の遺構 M1a における同遺構での二次葬の痕跡と植物遺存体の共伴である。もちろん二次葬行為と植物資源の保管の時期が必ずしも同時期であるとは断定できないが，仮にこれを肯定的に評価する場合，状況によって前述の役割を複数担った状態で「特殊建物」が複合的に機能し，同時期に「特殊建物」として複数の性格を有していた可能性を考えたい。また研究が蓄積されていない現状では個々の「特殊建物」の機能を特定することは困難であることから，このような理解が結論としてやや不明瞭ではあるが妥当であるとも考える。

Ⅴ．まとめと考察

以上，トルコ南東部・シリア北部の「特殊建物」について住居と比較しつつ，その構造的特徴，傾向を比較検討しその性格を考察した。各遺跡を概観した後に振り返ると，定住集落内に単数～少数の「特殊建物」を有する遺跡が優勢な PPN 期の西アジアにおいて，居住の痕跡がないが「特殊建物」が多数建築されたギョベクリ･テペ遺跡は極めて特異な『「特殊建物」の遺跡』であるといえる。また T 字形石柱はその表面の豊富な図像表現だけでなく形状も特徴的で，その関連遺構の広範な分布は PPNA ～ PPNB 中期のトルコ南東部におけるギョベクリ・テペ遺跡，あるいはその「様式」の影響力の大きさを示している。

また本稿におけるトルコ南東部・シリア北部の「特殊建物」の検討を通して，その特徴として新たに以下の 2 点が見えてきた。1 つは PPN 期に「特殊建物」構造の変化時期と一般的な住居構造の変化時期に生じる時期のずれであり, 三宅裕も指摘した点である（三宅 2014）。特にチャヨニュ遺跡やネヴァル･チョリ遺跡の「特殊建物」と住居で筆者が比較検討したところ，①「半地下式→地上式」という基礎構造の変化，②「円形（→楕円形）→隅丸方形→方形」という形状の変化，③「単室→前室＋主室（計 2 室）→前室＋主室（複室）」という内部構造の変化，という 3 点の構造的な変化とその時期について, 一般的な住居では時期的に先行し, 同時期の「特殊建物」ではそれに遅れて後続するという大まかな傾向があることが確認できた。このずれはギョベクリ・テペ遺跡では PPNB 前期～中期に相当する第Ⅱ層の半地下式構造をとる「特殊方形遺構」として，チャヨニュ遺跡では PPNB 前期に相当する「チャネルド・ビルディング」層の半地下式構造で円形の「スカル・ビルディング（BM1）」として，それぞれ顕現している。

もう 1 つは遺構内部の中央付近での仕切り壁による空間分割のありようである。すなわち遺構内部の中央の空間が仕切り壁によって完全に分割され，移動が制限されるか否かである。例えば当初から「特殊建物」の建築が意図されて築造される際，設計者は建物の性格を十分考慮して設計・建築しようとすることは明らかである。特に「特殊建物」の規模の大きさや内部のベンチ状構造物の存在を考慮した場合，その設計思想として，例えばネヴァル・チョリ遺跡の住居のように人々が集いやすい内部の中央空間を仕切り壁で等間隔に分割する，という発想は生じにくいと筆者は考える。実際に本稿で集成した限りでは「特殊建物」とみられる遺構において仕切り壁による中央の空間分割は確認できなかった。むしろ, PPNA ～ PPNB 期における「特

殊建物」の性格の核心は「建物を共有（化）する」という当時の人々の認識にあり，遺構内部の中央あるいは周縁を全く無視した仕切り壁による空間分割は，建物や室内空間に対する当時の人間の帰属意識があらゆる意味で「個人化」した結果であると考える。その意味では，PPN期の時期による遺構形態の変遷，あるいはギョベクリ・テペ遺跡や西アジア各地における「特殊建物」のPPNB中期以降における衰退と消滅（門脇2009，前田2013，三宅2017）は，当時の人々の建物の「内部空間」に対する意識の変化を反映している可能性があると筆者は考える。

謝辞

本稿は2020年12月に筑波大学に提出した卒業論文の一部を加筆修正したものである。本稿の執筆にあたり，筆者が最初にギョベクリ・テペ遺跡を知る機会をくださった，主査であった三宅裕先生をはじめ，副査の前田修先生，谷口陽子先生，滝沢誠先生，板橋悠先生に多くの御教示，御指導を賜りました。末筆ではありますが，記して深く感謝申し上げます。

註

1） PPNは英語で先土器新石器時代を表す“（the）Pre-Pottery Neolithic（period）”の略称。同様にPPNAは“（the）Pre-Pottery Neolithic A”，PPNBは（the）Pre-Pottery Neolithic B”の略称。
2） BCEは“Before（the）Common Era”の略称で“BC（Before Christ）”と同義。
3） これらの設定の詳細について，例えば小林謙一の研究（小林2019）などを参照のこと。
4） 例えば“Special Building”や“Communal Building”，“Collective Building”など多くの表現が存在し，日本語文献では「公共建造物」と訳出されることが多い（例えば三宅2014）。しかしながら「特殊建物」の機能・用途には不明瞭な点が多く，例えばギョベクリ・テペ遺跡の「特殊建物」を「（一部の限られた社会階級である）エリート層によって支えられ，利用される地域的な秘密結社の儀式の中心地」（Hayden 2014：pp.294）とする主張も存在するため，本稿では用語としての中立性を期すため，“Special Building”の訳語として「特殊建物」の語を用いる。
5） 標高785ｍ（Schmidt 2011b），海抜約770ｍ（Knitter et al. 2019）とも指摘されている。
6） 近年，シュミットは遺構が属する新たな土層として「第Ⅳ層」の存在を示唆している（Schmidt 2011a）。
7） 本稿では後述する遺構の特徴を鑑み，発掘責任者であったシュミットが用いた英語の“enclosure”（例えばSchmidt 2010）を援用し,「囲われた土地, 構内」というニュアンスを含めて第Ⅲ層の円形遺構を「エンクロージャー」と呼称する。
8） 第Ⅱ層ではこのような構造をとらない「特殊方形遺構」が多く検出され，T字形石柱を1本も有さない第Ⅱ層の「特殊方形遺構（Schmidtは“pillarless building”と呼称）」も確認されているが，T字形石柱がない「特殊方形遺構」が「特殊建物」の機能を有していたかどうかは不明である（Schmidt 2012b）。
9） 遺構中央に直立する大型T字形石柱（a central pair of T-shaped pillars）は，幅の広い方の側面部分が直上より見ておおよそ南北軸と平行に配置されている。
10）石灰プラスターの中に石灰岩の砕石をちりばめ，表面を磨いて平滑に仕上げる加工方法（三宅2014）およびその加工品。
11）シュミットは“small rectangular rooms”と呼称している（例えばSchmidt 2010）が, これでは「特殊建物」であることを表現できないので，本稿では第Ⅱ層の遺構を「特殊方形遺構」と呼称する。
12）2000～2002年，2005～2010年の発掘調査で計455体の人骨が検出されている。うち2体のみ頭部を

欠いた状態で住居の床下から墓として検出された。301 体が石製容器，敲石，石杵，石皿，砥石，石器，石製ビーズなどの副葬品を持ち，154 体は副葬品を何も持たなかった（Benz et al. 2013，Özkaya and Coşkun 2011）。

13）カールは，ハラン・チェミ遺跡の第 1 層における「特殊建物（Public Building）」との類似性を指摘している（Karul 2011）。

14）最終的にはPPNA期から銅石器時代初期（Early Chalcolithic）までの約4000年にわたって遺跡が営まれた。

15）例えば, 初期の「Skull Building（BM1）」の前身遺構や「Flagstone Building（FA）」の前身遺構が当てはまる。

16）この遺構の南側は遺跡の近くを流れるユーフラテス河の支流によって浸食されている。

17）このことから「a house of dead」とも呼称される（例えば Erim-Özdoğan 2011, Sagona and Zimansky 2009 など）。

18）遺構内部・外部の境界が不明瞭である。

19）原文では“earth plaster（enduits en terre）”と表記されている（Yartah 2013）。

20）本来は遺跡内の相対的な遺構規模の違いからその大小を比較する方法がより望ましいのかもしれないが，遺跡ごとに現時点で公表されているデータの質・量には差があり，その趣旨に基づく比較が困難であることから，本稿ではギョベクリ・テペ遺跡の遺構でも小規模なエンクロージャー A やライオンピラー・ビルディング（The Lion-Pillars Building）を考慮して「直径または一辺が 6 m以上」と設定した。

参考文献

Atakuman, Ç. 2014 Architectural Discourse and Social Transformation During the Early Neolithic of Southeast Anatolia. *Journal of World Prehistory* 27, pp. 1-42.

Banning, E. B. 2011 So Fair a House Göbekli Tepe and the Identification of Temples in the Pre-Pottery Neolithic of the Near East. *Current Anthropology* 52-5, pp. 619-660.

Benz, M. and J. Bauer 2013 Symbols of power - symbols of crisis? A psycho-social approach to Early Neolithic symbol systems. *Neo-Lithics* 2, pp. 11-24.

Benz, M., Coşkun, A., Rössner, C., Deckers, K., Riehl, S., Alt, K. W. and V. Özkaya 2013 First Evidence of an Epipaleolithic Hunter-Fisher-Gatherer Settlement at Körtik Tepe. *34. Kazı Sonuçları Toplantısı 1*, pp. 65-78.

Benz, M., Deckers, K., Rössner, C., Alexandrovskiy, A., Pustovoytov, K., Scheeres, M., Fecher, M., Coşkun, A., Riehl, S., Alt, K. W. and V. Özkaya 2015 Prelude to village life. Environmental data and building traditions of the Epipaleolithic settlement at Körtik Tepe, Southeast Turkey. *Paléorient,* 41-2, pp. 9-30.

Boric, D. 2013 Theater of Predation: Beneath the Skin of Göbekli Tepe Images. In C. Watts (ed.)*, Relational Archaeologies: Humans, animals, things. Abingdon,* Routledge, pp. 42-64.

Borrell, F., Junno, A. and J. A. Barceló 2015 Synchronous Environmental and Cultural Change in the Emergence of Agricultural Economies 10,000 Years Ago in the Levant. *PLoS ONE* 10-8, pp. 1-19.

Busacca, G. 2017 Places of Encounter: Relational Ontologies, Animal Depiction and Ritual Performance at Göbekli Tepe. *Cambridge Archaeological Journal* 27-2, pp. 313-330.

Çelik, B. 2011 Şanlıurfa-Yeni Mahalle. In Özdoğan, M., Başgelen, N. and P. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations and New Research. The Euphrates Basin*. Istanbul, Archaeology and Art Publications, pp. 139-164.

Çelik, B. 2014 Differences and Similarities between The Settlements in Şanliurfa Region where“T”Shaped Pillars are Discovered. *Türkiye Bilimler Akademisi Arkeoloji dergisi*, pp. 9-24.

Çelik, B. 2015 New Neolithic cult centres and domestic settlements in the light of Urfa Region Surveys. *Documenta Praehistorica* XLII, pp. 353-364.

Çelik, B. 2016 A small-scale cult centre in the Southeast Turkey: Harbetsuvan Tepesi. *Documenta Praehistorica* XLIII, pp. 421-428.

Çelik, B. 2017 A new Pre-Pottery Neolithic site in Southeastern Turkey: Ayanlar Höyük (Gre Hut). *Documenta Praehistorica* XLIV, pp. 360-367.

Dietrich, O., Heun, M., Notroff, J., Schmidt, K. and M. Zarnkow 2012 The Role of Cult and Feasting in the Emergence of Neolithic Communities. New Evidence from Göbekli Tepe, south-eastern Turkey. *Antiquity* 86, pp. 674-695.

Dietrich, O., Köksal-Schmidt, Ç., Notroff J. and K. Schmidt 2013 Establishing a Radiocarbon Sequence for Göbekli Tepe. State of Research and New Data. *Neo-Lithics* 1/13, pp. 36-41.

Dietrich, O. and J. Notroff 2015 A sanctuary, or so fair a house? In defense of an archaeology of cult at Pre-Pottery Neolithic Göbekli Tepe. In N. Laneri (ed.), *Defining the Sacred: Approaches to the Archaeology of Religion in the Near East.* Oxford, Oxbow Books, pp. 75-89.

Erim-Özdoğan, A. 2011 Çayönü. In Özdoğan, M., Başgelen, N. and P. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations and New Research. The Tigris Basin*. Istanbul, Archaeology and Art Publications, pp. 185-269.

Gresky, J., Haelm, J. and L. Clare 2017 Modified human crania from Göbekli Tepe provide evidence for a new form of Neolithic skull cult. *Science Advances*, pp. 1-10.

Hauptmann, H. 1999 The Urfa region. In Özdoğan, M. and N. Başgelen (eds.), *Neolithic in Turkey: the Cradle of Civilization, New Discoveries, Text.* Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları, pp. 65-86.

Hauptmann, H. 2011 The Urfa Region. In Özdoğan, M., Başgelen, N. and P. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations and New Research. The Euphrates Basin*. Istanbul, Archaeology and Art Publications, pp. 85-138.

Hayden, B. 2014 *The Power of Feasts: From Prehistory To The Present*. Cambridge, Cambridge University Press.

Hodder, I. and L. Meskell 2011 A ‘curious and sometimes atrifle macabre artistry’. *Current Anthropology* 52, pp. 235-263.

Ibáñez, J. J. (ed.) 2008 *Le site néolithique de Tell Mureybet (Syrie du Nord)* : *en hommage à Jacques Cauvin,* v. 1. Oxford, Archaeopress.

Karul, N. 2011 Gusir Höyük. In Özdoğan, M., Başgelen, N. and P. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations and New Research. The Tigris Basin.* Istanbul, Archaeology and Art Publications, pp. 1-17.

Karul, N. 2021 Buried Buildings at Pre-Pottery Neolithic Karahantepe. *Türk Arkeoloji ve Etnografya Dergisi* 82, pp. 21-31.

Knitter, D., Braun, R., Clare, L., Nykamp, M. and B. Schütt 2019 Göbekli Tepe: A Brief Description of the Environmental Development in the Surroundings of the UNESCO World Heritage Site. *Land* 8-4, pp. 1-16.

Kornienko, T. V. 2009 Notes on the Cult Buildings of Northern Mesopotamia in the Aceramic Neolithic Period. *Journal of Near Eastern Studies* 68-2, pp. 81-101.

Özkaya, V. and A. Coşkun 2011 Körtik Tepe. In Özdoğan, M., Başgelen, N. and P. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations and New Research. The Tigris Basin*. Istanbul, Archaeology and Art Publications, pp. 89-127.

Peters, J. and K. Schmidt 2004 Animals in the symbolic world of Pre-Pottery Neolithic Göbekli Tepe, south-eastern Turkey: a preliminary assessment. *Anthropozoologica* 39-1, pp. 179-218.

Pustovoytov, K. 2006 Soils and Soil Sediments at Göbekli Tepe, Southeastern Turkey: A Preliminary Report. *Geoarchaeology: An International Journal* 21-7, pp. 699-719.

Rosenberg, M. 2011 Hallan Çemi. In Özdoğan, M., Başgelen, N. and P. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations and New Research. The Tigris Basin*. Istanbul, Archaeology and Art Publications, pp. 61-78.

Sagona, A. and P. Zimansky 2009 *Ancient Turkey*. New York, Routledge.

Schmidt, K. 2000 Göbekli Tepe, Southeastern Turkey A Preliminary Report on the 1995-1999 Excavations. *Paléorient* 26-1, pp. 45-54.

Schmidt, K. 2010 Göbekli Tepe - the Stone Age Sanctuaries. New results of ongoing excavations with a special focus on sculptures and high reliefs. *Documenta Parehistorica* 37, pp. 239-256.

Schmidt, K. 2011a Göbekli Tepe. In Özdoğan, M., Başgelen, N. and P. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations and New Research. The Euphrates Basin*. Istanbul, Archaeology and Art Publications, pp. 41-83.

Schmidt, K. 2011b Göbekli Tepe: A Neolithic Site in Southeastern Anatolia. In Steadman, S. R. and G. McMahon (eds.), *The Oxford Handbook of Ancient Anatolia: 10,000-323 B.C.E*. New York, Oxford University Press, pp. 917-933.

Schmidt, K. 2012a Anatolia. In Potts, D. T. (ed.), *A Companion to the Archaeology of the Ancient Near East. Volume I*. Chichester, Wiley-Blackwell, pp. 144-160.

Schmidt, K. 2012b *Göbekli Tepe: A Stone Age Sanctuary in South-Eastern Anatolia*. Berlin, Ex Oriente e.V.

Schreiber, F., Coşkun, A., Benz, M., Alt, K. W. and V. Özkaya 2014 Multilayer Floors in the Early Holocene Houses at Körtik Tepe – an Example from House Y98. *Neo-Lithics* 2/14, pp. 13-22.

Stordeur, D. 2015 *Le village de Jerf el Ahmar (Syrie, 9500-8700 av. J.-C.) L'architecture, miroir d'une société néolithique complexe.* Paris, CNRS ÉDITIONS.

Yartah, T. 2013 *Vie quotidienne, vie communautaire et symbolique à Tell 'Abr 3 – Syrie du Nord Données nouvelles et nouvelles réflexions sur l'horizon PPNA au nord du Levant, 10,000-9,000 BP, Volume I – Texte*. Unpublished Ph.D. dissertation. Lyon, Université Lumière-Lyon 2.

門脇誠二　2009「西アジア新石器集落の崩壊と再編成」西秋良宏・木内智康（編）『農耕と都市の発生：西アジア考古学最前線』同成社　5-14 頁.

小林謙一　2019『縄紋時代の実年代講座』同成社.

前田　修　2013「1.5 新石器時代（1）」西アジア考古学講義ノート編集委員会（編）『西アジア考古学講義ノート』日本西アジア考古学会　19-22 頁.

三宅　裕　2014「西アジアの石器時代―農耕・牧畜と社会の関係―」筑波大学西アジア文明研究センター（編）『西アジア文明学への招待』悠書館　90-103 頁.

三宅　裕　2017「揺らぐ新石器革命論―農耕・牧畜の起源と新石器時代の社会―」常木晃・西秋良宏・山内和也（編）『季刊考古学』141 号 雄山閣　33-36 頁.

図版出典

第 1 表　主に Schmidt（2012a:146）と Borrell et al.（2015）を参考に筆者作成

第 1 図　筆者作成

第 2 ～ 4 表　筆者作成（各遺跡の個別情報については参考文献を参照のこと）

第 2 ～ 5 図　筆者作成

上田浩将（筑波大学大学院）

“Special Buildings (Public Buildings)” in the Pre-Pottery Neolithic of Western Asia

UEDA, Kousuke

This paper discusses the "Special Buildings" that existed in the southeastern region of the present-day Republic of Turkey and the northern region of the Syrian Arab Republic during the Pre-Pottery Neolithic A-B period (PPNA-PPNB). The purpose of this paper is to review and compare the structures at the site of Göbekli Tepe, where many "Special Buildings" were constructed and those at other sites in southeastern Turkey and northern Syria, in order to clarify their structural characteristics and functions.

There are some differences in the "Special Buildings" of southeastern Turkey and northern Syria. The analysis suggests that "Special Buildings" are usually located within settlements and Göbekli Tepe, where concentration of only "Special Buildings" were discovered, is a unique case. It is assumed that these "Special Buildings" functioned in multiple ways and had multiple characteristics depending on the site.